ナイト・スクウェア<evolution>

inea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナイト・スクウェア＞ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ＜

【Ｎコード】
Ｎ６３３２Ａ

【作者名】
ｉｎｅａ

【あらすじ】
核暴走のため都心に壊滅的な被害が出た日本。治安は乱れ、殺人・窃盗など悪質な犯罪が横行していた。その状況をみかね、政府は犯罪者を犯罪者で封じるという打開策“レボリューター計画”を打ち出した。そんな未来に生きる元重科犯罪者の少年沢森尭良のドタバタな日常を描くアクション＆お笑い＆ラブコメディ。

―〔零〕―『Starting a project.<始動>

それは戦慄の序章か。

夜　その都市は監獄のように見える。

それは、
決して触れてはいけない
決して見てはいけない
決して開けてはならない
パンドラの箱の様な物

犯罪者が狭しと飛び交い
毎夜　紅き花びらを散らす

その状況をみかねた政府は、ある打開策を打ち出した

毒に毒をもって制す

目のある者に選ばれた囚人たちが、

一つだけの自由

を得るかわり、都市にいるさまざまな犯罪者らを捕らえるという危険極まりないものだった

そして　現代

我々は元　重科犯罪者　―――ｒｅｖｏｌｕｔｅｒ＞＞レボリューター＜　たちと共に生活をしている

…政府保管『現代秩序における犯罪記録』より抜粋…

「ねぇ、そこのモグモグ魔くん」
壱花>イチカ<ちゃんが俺に話しかける。
「ふぁ？　あふたふぉ？」
「何言ってんのかわかんないっつーの。だいたい飛ばさないでよ…汚いなぁ」
俺は急いで中に入っているブツを飲み込んだ。
「あ～ん！　ごめんよぉ、壱花ちゃぁん！！　で、俺に何か用？俺、壱花ちゃんの頼みなら何でもするよぉッ」
「…あんた本当に何でもしそうで怖いわよ。頼みとかじゃなくて、先生きたっていいたかっ」
「あぁ！！　ありがとぉ壱花ちゅぁんッ！　ホント壱花ちゃんって優しいんだ！！　お礼に俺のキッスをうけとってく」
「いるかボケぇッ」
かわりに壱花ちゃんの投げたパンにキス。
「弓瀬のこと、ホント好きだよな」
「告っちゃえば？　尭良くん」
うへへ～。それもいいかなァ～…

俺は沢森　尭良>サワモリ　アキラ<、中学三年生。俺は今　弓瀬　壱花って女の子に夢中……。可愛くて、優しくて、頭良くて、性格も良し！　俺にとって彼女は、理想のレディ。
ま、そんなんで今は学校の放課中。

キーン　コーン

カーン　コーン

「うわっ！！　やっべぇ」
俺はとにかく目の前の食料を口に詰め込んだ。
「あんた……よくまぁそんないっぱい口にいれられるわね。感動越して呆れるわ……」
「ほふぉめとこちょ」
「飛ばすな！　ほめてない！！　さっさと喰えッ」
「どなるな、弓瀬～。先生はもう着いてるぞ。まぁどうせ常習犯のやるこったからな、そろそろ俺も慣れたわ」
ドアにもたれかけた先生の言葉にみんなが笑う。
しゃーねぇだろ？　俺は元気な少年よ？　腹減らねぇわけないっつーの。
「あ、そうだ。沢森、お前この授業終わったら、早退な」
「え？　何でっすか？」
「お前の親父さんが、急用でどっか行くからついて来いだとよ」
クラス中から　ええ～　という声がもれる。ちなみに俺も賛同した。
「何だ、沢森。早退できんだぞ？　俺なんか今からでも帰る用意するけど」
「だって……壱花ちゃんとちょっとでも長くいたいんだも～ん」
「じゃぁ弓瀬をセットで早退させるか」
「お！！先生、気が利きますねぇ」
「ちょっと！　やめてよッ」
今度は笑いが響きわたる。
「まぁそんなわけだ。わかったな、沢森」
「ラジャ」
「じゃぁ授業に入るぞ。現代日本の３２ページあけろぉ」
俺はカラの弁当をしまい、ノートをひらいた。　仕事がはいったか……
親父？そんなもん俺にはいない。物心ついた時から……――

俺は一人だった。

―〔壱〕―『Be ambitious, BOY???<少年と

巨大ビルが俺の目の前に建っている。
早退させやがって……。壱花ちゃんのいい水着プロポーションが見れなかったじゃねぇか……。
俺はそう思いながら、ビルの路地に入り、奥の階段を下がる。下がってちょうど、灰色のドアが見えた。開けると金属のきしむ、あの嫌な音が聞こえてきた。
「ウーッス！」
入った直後、安眠アイマスクをサングラスをかけるかのようにつけている、黒いランニングシャツのエロ男がからんできた。
「……」
「おぉ！？　その顔はアレだな。惚れた女に未練でも残して、ガッコから帰ってきたって感じだなぁ」
「ホントあんたはそういうのに関しては、ものすごい正解率をたたき出すよな」
「何言ってんだよ。この恋多き男は、お前の思春期の悩みのことを心配してやってんだぞォ」
ニヤニヤしながら言っているうちは、楽しんでるとしか思えねぇよ…。
自称、恋多きこの男は井　紅壬＞ジン　ホンレン＜っていう、日本人の俺より日本語がうまい中国人。ちなみに経歴は俺とほぼ同じ。違うのは、事件内容の『ヤバさ』ぐらいだと思う。
実は俺、すごくヤバい仕事をしている。やばいっつっても警察が対応できなくなった犯罪者や脱獄囚を捕まえるって仕事。軽く言うとな。
でも、そんなヤツラにまともな人間はいない。俺たちにまわってくる事件すべてが、殺人鬼の確保・暗殺集団結成の阻止などなどの

闇っぽいヤツばっか（今の日本は廃れていますからなァ）。こういうヤバいのにはヤバいので対抗しようと、よりすぐりの人格的危険の少ない重科犯罪者の現場投入を政府は発案し、実行しているってわけ。
まぁ、優しい犯罪者だってタダじゃ命張るのはやだから、お国はプレゼントをつけてくれた。
そう。

自分がしたいことのための自由を

それを見返りに俺らは住み込みで働いている。

あ、そうだ。これは絶対聞かなきゃ…ヤバい。
「もしかして、学校に電話したのって……紅壬？」
「違ェよ。そんな細けぇこと、俺がするわけねぇだろ。玖月だよ。……てか何だよ、そのさも俺が電話してたらやだなぁって言い方はよ」
そりゃそうだろ。あんたが電話したら、俺の父親がチンピラとして見られんだぞ。壱花ちゃんにそんなことでマイナス評価つけられんの、俺はイヤだ！
俺が心の中で陰口をたたきまくってると、急に紅壬が深刻な顔になった。
「なななんだよ、その顔！」
俺は少しドキっとした。まさか俺の心を……――
「何だよ、慌て過ぎだぞ」
「だって急に真剣な顔になったもんで心の中を読ま……。そういや、何であんたここにいんだよ？今お昼寝タイムだったんだろ」
俺は頭のアイマスクを見ながら言った。
「いや、な。玖月がちょい悪徳薬剤師まがいの危険な行為をしてる

か」
「だぁれが悪徳だってぇ？」
後ろから突然、別の男の声がした。
「あ。尭良もう帰ってたんだ。おかえり～」
「はぁ」
「いや～ネボスケ君がドアに向かって独り言してたと思ってね。……ちっ」
「『ちッ』て何だよ！！『ちッ』て！」
「べっつに～。気にしない気にしな～い」
この人は薊　玖月＞アザミ　クヅキ＜。俺らと同じ元　重科犯罪者。主に後援をしている。玖月さんには別名がある。
“Ｍｒ．Ｒａｖｅｎ＞＞ミスターレイブン＜”と呼ばれた毒殺魔という別名が。
別名がつく犯罪者は少ない。玖月さんもそれなりのヤバいことをしていたから付いたんだろう。まぁ詳しくは知らないけどね。
「その言い方が一番怖いんですけどね……玖月クン」
「いやいや、怖がらなくてもいいですからね、紅壬クン」
にこやかに言う玖月さんに、冷や汗かきぎみの紅壬。
今日も男達の戦いが始まる……。アハハハハ～。
その光景にちょっとしたナレーションを入れつつ、俺が苦い顔になりそうな時だった。
「グ～タラ単純エロ本男に薬品バカ！　作戦会議そろそろ始めるんだから、リビングに来なさい！……ってあたしの話、聞いてんのかァ？！」
「玖月さんと紅壬は、静かな男の戦いを繰り広げている真っ最中だよ、ルイナ」
俺は奥から叫ぶ女に向かって言った。
「あぁ。おかえり尭良。ちょっと単純アホをリビングに連れてきてくんない？」
紅壬、この言葉に即反応。

「単純アホって何だよ、ペチャ子！」
「あんたのことに決まってんだろが、こんのスケベジジィ！」
最近ルイナの言葉遣いがどんどん悪くなっていってる気がする。いいのかよ…。あんたもうすぐ結婚を考えるべきお歳だってのに。紅壬と言い合う女は、Ｒｕｉｎａ　Ｗｅｌｉｃ＞ルイナ　ウェリック＜。うちの支局の副局長でただ一人の女性仕事人。だけど、みんな性格上の問題から、男のようにあしらっている。そのため……。
「うっせーよ！！　へちゃむくれ胸なし童貞半男！」
「んだと？！　口軽汗くさ野郎ォッ！」
と、まぁ言い合いがヤバい方向へ進んで行くこともある。そんなに深夜向けじゃないのが幸いだ。
でも、これ以上言い合いを続けてたら、玄関が暑くなるし、それに……ある人がキレたら大変なことになる。
そう。恐怖と魔の三時間説教スペシャルタイムを味わうということに……。
玖月さんもそう思ったのか、止めにはいった。
「お二人さん。そろそろお止めになった方がよろしいんでは？　奥の方からドス黒い殺気がぷんぷんきてますよ」
異常反応を示した紅壬とルイナ。俺たちが恐る恐る、玖月さんの指差す方を見るとそこには……。
眉間にしわをたっぷり寄せた局長がもたれかかっていた。そして、静かに言う。
「四時間、説教だな」
キター！　しかも何気に増えてるー！！
こうして本当に説教をされるはめになった。

ヘルプ・ミー。

「さて……作戦会議を始めるか」
局長は満足そうに言って、イスに座る。対する俺たちは……。
「何だ、お前ら。もうへばったか？　仕事はまだ、こなしていないぞ」
いやいやいや。あんたのせいだろが。玖月さんが必死のネゴシエイトをしなかったら、ホントに四時間お説教する気満々だっただろうが。
俺はそんな嫌味を言ってる表情がバレないように、机に顔を伏せた。
隣りの玖月さんは、目が平たくなっている。眠かったからな……。ルイナは涙目になっている。あくびしまくってたからな……。紅壬は頭を机にたれさせている。寝てたのバレて、局長に殴られたからな……（湯気出てそう）。
こんな感じで、み～んな殺気立っているっていうのに……。
「……最近平和すぎて、なまったか。これから２０キロマラソンを毎日す」
「みんな！局長の気がさらに狂わないうちに会議に入ろうね！　さ、起～きた起きたァ！」
さっすが副局長！　嫌味を言いながら、過酷なサバイバルマラソンをうまく回避したな。俺はそっと玖月さんの方を向いた。それを察知したのか、
「イヴンは言ったらマジでやるからね。君と似てるよ」
と、冷笑しながら小声でいった。
イヴンというのは、うちの局長さんだ。Ｅｖｅｎ　Ｓｉｌｒａｉｎ＞イヴン　シルレイン＜。玖月さんや紅壬を支局の一員として迎えいれた張本人。ちょっと、むちゃくちゃな性格をしている。

類が変な友を呼んじまったヤツだよ……。
そんな局長の友の一人が、顔を上げて言った。
「で、何だよ。今回のお偉いサンの頼みごとはよ」
「……上層部も苦戦している事件なのだが」
局長はそこで言葉をきり、ルイナの方を見た。ルイナは一つ溜め息をついて立ち上がると、ブラインドをしめた。
「すまない」
「いいですよ。いろんな意味でアッシーには慣れましたから」
すんませんね。俺が学校ある日、おつかいに行かせちゃってますからね。
ルイナが席に戻ったところで、部屋の電気を消した。不気味に暗いリビング。それを増させるかのようにプロジェクターがつけられ、白い壁に画像が写し出された。
「ありがとう、玖月」
「別に。毎回やらされてるから、お礼なんていいよ」
すごい。みんなここぞとばかりに嫌味言ってる。
「そうか。本題にはいる」
でも、局長は気にしていないみたいだ。俺もあんな風に生きたい！　……誰かに呪い殺されるの覚悟でやらなきゃなぁ。
局長が画像の位置の調節をしたのか、俺の顔に光がかすめた。
「よし。よく見えるようになった」
さほど変わってねぇですぜ？
「この映像をみて欲しい」
恒例のお言葉ですな。俺はそう思いながら、壁の方を見た。
「あ〜あ、怖い顔しちゃって。即死じゃない？　この人」
玖月さんが相変わらずの眠たそうな目を映像に向けながら、言った。
「あぁ、言う通りだ。最近連続で起きている変死事件だ。しかも針のようなものが無数に刺さって即死状態の、な」
「タチ悪いっすなぁ、最近の犯罪は」

紅壬がイスにぐったりもたれて言った。
「しかし、犯人はあがっている」
「変わったヤツですねぃ」
ルイナが頬づきをしながら言った。いやいやルイナ。その道の人は、みんな個性が強い変わったヤツだと思うぞ！
……てか、やる気ねぇ～ッ！
「で、何すんのさ。待ち伏せでもして、袋叩きにすんの？」
「正義の鉄拳でもくらわすのか？」
それって今、局長にしたいことっすよね？
「いや、陽動作戦をおこなう。内容はこれからだ。ちなみに囮は尭良だ」
「って、それはもう決定してんのかよッ！」
四人の目がいっせいにこっちを向く。
「なななな何すか？！」
「頑張ってくれ」
「頑張れ！」
「頑張ってね！！」
「頑張れや」
お前ら……全員呪い殺してやる。

―〔 弐 〕―『Enough is enough!!!!<もう、う

夜の町を歩く俺。微妙に靴の音が響く。
「ねぇねぇ、ちょっとォ」
無視。
「ねぇってばぁ」
再度無視。
「聞こえてんだろ～。無視しないでよぉ」
再々度無視。
「ちょっとぉ。お嬢ちゃぁ～ん」
俺はできるだけ笑みを作り、振り向いて言った。
「お～じ～さんっ。あたしのォ、超全力高速左ストレートをくらってもいいってんならァ、話してあげてもいいですよォ？」
俺がいくら可愛く笑っても目が殺気立っていたのか、変態おじさんは、
「け、結構です」
と、貧弱に言って、逃げていった。
何が陽動作戦だ。何が囮だ。ただ単に、元気だけどまだ可愛さが残った俺に女装して欲しかっただけだろが。これじゃ……萌えぇ～ッ！！　とかいってる眼鏡どもしかむらがんねぇよ！
ちなみに今の服装。ピンクのフリフリスカートに、赤の女物のデコレーションレースジャケット。靴はブーツで、髪型が……。
とにかく、ロリータファッションじみた服に髪型なんだよ。あぁ。学校の演劇部に見られたらおしまいだ……。俺の人生、正直終った。
俺が心からしょげていると、耳から遠い音で声が聞こえてきた。
「まだまだかわいいなぁ、尭良は。よく似合ってるよ、ホント。ク ク……プハハ」
あんの毒物ジジィ……ッ！

「プ……あれで何人目だよ……引っ掛かったの。イヒヒヒ」
エロサルが…ッ！
「そ、それ以上言うな、お前ら。クプっ……尭良だって一生懸命やってんだから……ウハっ」
ヲタクまがい局長ォッ！　あんたがこの服きせたんだろーがッ！！　将来ハゲになりやがれれッ！　抜けろ抜けろ抜けろ抜けろ抜けろぉッ！
俺が怒り狂って大声で叫びそうになったときだった。
今までとは明らかに違う、静かな足音が聞こえてきたのは。

―〔 弐 〕―『Enough is enough!!!!<もう、う

俺は振り返らず、そのまま内股気味で歩いた。路地から出るように。すると、後ろの足音が早くなる。

――――チャリ

金属音がした。

来る。俺の本能がそう言ってる。いつのまにか、耳の小型イヤホンから雑音が聞こえなくなった。沈黙があたりを包んだ瞬間だった。

それを壊すかのように、紅壬の呟きが聞こえた。

「……来た」

すると、急に足音が止んだ。俺は地面を見た。影が俺の頭より上にある。

跳んだか。俺は後ろにさがった。ウエスタンブーツで走りにくいが、とにかくさがった。

そして、金属が地面に当たったの轟音とともに、男が着地した。イヤホンから別の声が聞こえた。

「目視完了。これより犯人の逮捕に移行する」

局長の静かな声が入ってくる。俺、囮だから何にもしなくていいよな？　ってかこの服着てて捕まえろとか……。できるわけねぇだろッ！！

だが、向こうはそんなこと知ったこっちゃない。後ろにさがった俺に、突っ込んできた。

「ひょえぇぇぇッ」

俺は台本通り、情けない声を出し、路地の奥に逃げた。

「ひょえぇぇぇぇぇッ！」

俺は、もう一回かわいらしくウソ叫びをした。よく分からないけど、オカマの道が見えてきた気がした。

俺が別のことで冷や汗気味になっているとき、後ろの音が止まっ

た。また、跳んだのか。いや……地面に影はない。逃げられたらまずいな。奥に誘いこまなきゃ――

俺は一回犯人の様子を確かめるため、振り向いた。

男は手に持っていた金属棒の片方の先端に口を当てている。あれ…？あの体勢、テレビで見たことあ……。

「――――フッ」

男は勢いよく息を吹き込んだ。瞬間、俺の頬に何かがかすめる。かすめたところが切れて、血が出てきた。

男は舌打ちをしてから、また口を棒に近づける。

あれ……そうだ。必●仕事人で見た！　吹矢だ！（てか、俺がそんな時代劇見るほど、最近平和だったんだな）

男は金属棒――吹矢にまた息を吹き込んだ。俺はスカートを王子から必死に逃げるシンデレラ風に持ちながら、走った。

どうやら二回目の吹矢も不発だったらしい。後ろからまた舌打ちが聞こえ、足音がついてきた。すると、耳のイヤホンから、声がした。

「紅壬、タイミング見計らって降りてよ。僕は狙撃専門じゃないんだから」

「わぁってる、わぁってる」

「てか局長。これって単純バカとくーちゃんだけで十分ですよね」

「おいペチャ子。今お前、何気に喧嘩売った？」

「むゥ。僕はグラマー娘じゃないよ」

「誰も倖田●未なんて言ってないわよ」

「さらっと俺を無視すんなよッ」

下らない会話を聞かされた俺は溜め息をつきながら、指輪形状小型マイクに口を近づける。

「あの……早くしてくれませんかね。連続殺人犯に終われてんですけど、こっちは。ホントいいっすよね、高みの見物って。よすぎて呪ってやりたい」

一瞬イヤホンの向こうが凍り付いた気がした。俺、そんな怖い声

だしたっけ。
沈黙の後、紅壬の声が聞こえてきた。
「ま、まぁ落ち着け、尭良。ちゃんと助けてやっからよ」
だったら早くしてよねッ！
機械越しの会話をしていると、後ろから大声が聞こえた。
「くっ……逃がさん！！」
一体この格好に何の秘密があるんだろう。ただの赤ずきん風ロリファだぜ？
相変わらず追って来る男に疑問を抱きつつ、俺は走った。もう少し、あと少しで路地のつきあたり。
そこで俺は走るのをやめ、振り返った。
「フ……やっとあきらめたか、女ァ」
振り返った俺に、ほくそ笑む男。
俺は何でこんなロリファ女を追ってくるのか知りたかったため、可愛く声を出した。
「何でェ、私をォ追ってくるのォ？」
棒読みで悲劇のヒロインを演じる俺。なぜか男は低く身構えた。
「とぼけても無駄だ。あのとき、俺の顔を見てただろ」
……そっか。目撃者の服なんだ、これ。で、俺が一番背が近いから囮をやらされたんだ。
「……そうならそうと言えよバカ～」
「ん？」
「いいえ！　何でもないのォ」
素が出かけた俺に、少し疑いながらも男は金属棒を口に近づける。
「終わりだ、女」
男はそういうと、吹矢に息をいれた。俺はそれをよけつつ、後ろの壁に向かって全速力で走った。
「無駄なことを……」
また男はほくそ笑んだ。
はッ、お前が無駄なんだよ。今に分かるぜ。俺はそう思いながら、

壁をけり、勢いをつけて飛んだ。そして、ハリウッド映画のスタントのように、男の頭の上で宙返りをする。
「……んなッ」
男は驚いていた（そりゃそうだわな。ロリータまがい女だと思ってたヤツが、いきなりスタントマンみたいなことすんだからよ）。
そして俺が着地した時だった。もう一つ別の着地音がして、
「はい、つかまえた～」
と、いう紅壬の声が聞こえた。
男は一瞬のうちに変な体勢ではがいじめにされていた。はがいじめにされた男が無理やり裾をまくられて、腕の肌が露出されている。
「く！　放せッ！」
もがく男に紅壬はうんざり気味だった。
「動いて変なとこにぶっ刺さっても知んねぇぞ。……玖月先生ェ、注射お願いしまーす！！」
――プシュッ
腕に黄色いブイつきの針が刺さり、途端にぐったりしだす男。
「く……玖月。てめぇ、どんな催眠薬ぬったんだよ？　あと1ミリずれてたら、俺にあたって……――」
「事件解決には、多少の犠牲はつきものだよ」
玖月さんの冷静な声が聞こえた。
午後八時すぎ。無事、犯人逮捕。
おカマ時間の長かった今日は、仕事と共に終わりを告げた。

―〔参〕―『Are you an enterertainer ?<.

「朝だぞ～！　お～き～ろ～ォ」
目覚まし時計から、●寛平風の声が聞こえ、俺は目が覚めた。ふとやかましい時計を見ると８時――――
「尭良ァ！　もう８時２０分だよ！！　学校おくれるよ～ッ！」
一階から玖月さんの大声が聞こえてきた。はい？　何言ってんだァ？　今日は土曜じゃねェか？

「今日はまだ金曜だぞ～。ねこけんなァ」

今度は紅壬の声が聞こえた。
……。……。
ギャぁ――ァああッ！？　ベタだァッ！　ゼッテェこの状況、漫画とかアニメとかに出てくるベタな遅刻だァッ！
ちっくしょう！どこだっ？！　ネクタイネクタイネクタイ……ああああった！　でも冬服じゃねぇよッ。シャツシャツシャツシャツ……。
あああったあった！　昨日ハンガーにかけてたのすっかり忘れてた。
俺は服を着替え、かばんに教科書を詰め込み、急いで下に降り玄関にたどり着いた。
「いってきまぁーすッ」
「尭良！　お弁当忘れてる」
玖月さんの言葉で、キッチンにリターンダッシュ。机の上にあった３つの弁当箱をかばんにつめる。大中小……よし！　全部そろってる。
「いってきまぁーっす」

再び玄関に行き、ドアを勢いよく開ける。朝の太陽の光が路地にも入っていて、まぶしかった。

でも、今の俺に暖かな光によいしれている余裕はナシ！

「お～く～れ～る～ッ！」

俺は本当に情けない叫び声をあげながら走った。

―〔参〕―『Are you an enterteiner ?<

静かな朝のショートタイム。響くのは担任の声だけ。
「えーあとは……。てか今日は妙に静かだよな」
気付こうよ。クラスでも一番うるさい早弁問題児いないじゃんか。
しょうがないから、私は手をあげた。
「ん？　どしたぁ、弓瀬」
「早弁くんは遅刻なんですか？」
「あ……」
この瞬間、みんながアイツを思い出した。顔に『何かいつもより足りないっと思ってたら……』ってのが、ありありと出てる。ちなみに担任の顔にも。
「アイツ……遅刻はしたことなかったのにな。明日の天気があやしいな」
遅刻した事無かったんだ。それは感心ね。
「まぁ沢森のこった。そのう」
担任がここまで言ったときだった。
――――ズッガララッ
「遅れてすんませんでしたァっ！」
あんたはヤクザですか？　とツッコミたくなる言い方をし、早弁くんが入ってきた。
「よぉ沢森ィ。今日はどうしたァ？」
担任もやくざだった。
「寝坊っす！　こっつぁん」
「お前、自分の担任をちょっとぬけてる相撲取りっぽく言うか？」
「いーじゃないっすか。こっつぁんがコエトウって名字してっから悪いんすよ」
「それは先祖にいってくれ。だいたい俺の名前はエツガシラっつっ

てるだろが。いつになったら、まともに覚えてくれるんだ？」
「一生無理っすね。先生がヅラしないかぎり」
「俺がヅラしたらルール違反だろ？　お前と違ってこんないい男がよ」
「先生、それは自己満ですよ？」
と、延々と続きそうな嫌味のトークを私は無視し、１時間目の教科の用意をした。
「……とにかく席に座れや」
「あいよ」
遅刻人は言い合いをやめて、席にむかった。
ヤツの席は私のとなり。ちなみに彼が朝一に私に話しかける言葉は……。
「おっはー、壱花ちゅぁん。愛してるよぉッ！」
死んでください、私のために。マジで。だいたい『おっはー』ってチョイ古いし。しかも『愛してるよ』とか言って、アンタはアメリカのバカップルに憧れも持ってるんですか？　そんな事よりも、三十一人の大衆の前で叫ぶのやめろや！
と、心に怒りの言霊を秘めながら、バカにむかって最大限の皮肉を込めて、ほほ笑んだ。
私が引きつった笑顔を浮かべていると、前の方から声がかかった。
「いやいや、壱花。怖いよ？　その笑み何気に腹黒さがあって、いつもの倍に怖いから」
斜め前の席に座っている我がクラスの総務、つまりクラスの一番のお偉いさんであり、私の親友の高城　宏奈＞タカシロ　ヒロナ＜が言った。
「んなこと言うな、総務！　ほら、こんなに素敵な笑顔じゃないか」
尭良くん、ちゃんとした眼科を紹介してあげようか？
「尭良くんって、ポジティブ・シンキングだね」
私はヤツのせいで、ネガティブ。
こんなふうに心の中でボコボコにツッコミを入れているけど、尭

良のことを真剣に嫌いにはなれない。俗に言う憎めないヤツなのかな？

「あのね、総務。ネガティブは頑固なアホしかできない、バカな思想なんだよ？　オーケー？」

いや、憎めました。かなり憎めましたとも。頑固で悪かったわね。てうか、ポジティブは、かなりの単純しかできない技だよね。

「あ。ねぇ壱花ちゃん。一時間目の授業って何？」

「野村の現国」

「……何で怒ってんだ？」

「知るかい」

はぁ。完璧にあんたのせいよ。

私は横睨みしながら、尭良の顔を見た。目の下あたりの頬にバンソウコウが貼ってある。

「どうしたの？　そのバンソコー」

「え、これ？」

「うん」

「あぁ……紙で遊んでたら切れちった。ほら、ノートでもめくろうとして指とか切れるだろ？」

「ふぅん」

「あ、壱花ちゃんてば気にしてくれてるの？」

「そんなんじゃな」

「あ～り～が～トンコツスープゥッ！　壱花ちゃんがここにキスさえしてくれれば絶対治る！！　はいっ」

顔をこっちに突き出してくる尭良。私はそこに超一級のフックをかます。イスごと倒れていくアイツを見ながら、私は思った。

神様。どうか　アイツを……地獄にたたき落として。

―〔 参 〕―『Are you an enterteiner ?<

「何だ、そのガーゼ？ガッコで何かしたんですかい？」
俺はニタニタしてる紅壬を見ながら言った。
「関係ねぇだろが」
「あぁ！　その顔ァ。惚れた女に一発かまされたのか？」
「あんた絶対見てただろ？　絶対学校で見てただろ？」
ストーカーをしているとしか思えない紅壬に少しビビる俺。
「ところでさ、玖月さんは？」
「お買い物～」
「そう……んじゃもう一つ聞いていい？」
「何だよ」
「あんたの両脇の女性は誰だよ！！」
女の人が、俺の言葉に
「ハァ～イ」
と、手を振った。
「あぁ、可愛いだろ。胸もちょうどいいし。ルイナも見習えってんだよ。なぁ尭良」
いや、俺が気にしてるトコと違ぇよ！
「え？　この子がアキラくん？」
「い～や～だぁ！　マジで超かわいいじゃんッ」
「そうか？　俺には憎たらしいガキにしか思えねぇけど」
憎たらしくて悪かったな。まぁいいや。魔王の超絶極悪非道制裁くらったって、俺は知らねぇかんな。
「あたし尭良くんのこと、好きになっちゃおっかなぁ」
「おいおい尭良ァ。俺の女とんじゃねぇぞ」
知るか！　マジで逝ってくれ！　それに俺が好きな女の子は、壱花ちゃんだけだァ！

俺が紅壬にちょっとした殺意を持ったとき、後ろで突然、物が落ちた音がした。振り返ると玖月さんが立っていた。玖月さんは女の人を横目で見ながら、聞いた。
「紅壬。何、やってんの？」
「よぉお帰り」
「あ、もしかして紅壬の彼氏ィ？」
「んなわけねぇだろ。俺はホモじゃねぇし」
そう言ってる紅壬を尻目に、玖月さんの雰囲気に『殺』という文字が浮かんでくる。魔王降臨だ。怒りの的じゃない俺でも怖い。
玖月さんの手がそっと紅壬の肩にのる。とうとう魔王が動いた。動いてしまった。
「紅壬くん、ちょっときなさい」
玖月さんはとびきり笑顔を見せながら、いやがる紅壬をソファーから無理やり引きずり下ろし、階段をそのまま上がっていく。
そして……。

――――ズッガーン

ものすごい轟音が聞こえたあと、黒い煙が階段の上から見えてきた。
そこから玖月さんが平然と笑顔で出てきて、女の人達に向かって言った。
「気をつけてくださいね。変なヤツだから、可愛いお嬢さんたちがいると、すぐナンパして……てことになるんで。じゃあ、お帰りいただこうかな」
玖月さんの笑顔に女の人達はウンウンとうなずくと、逃げるように出ていった。
「あの……玖月さん」
「ん、何？」
「ズッガーンて……」

「うるさかった？　ごめんね」
「そうじゃなくてさ……」
玖月さんは俺の言葉を無視して伸びをした。
「あ～スッキリした」
「もしかして、アレ？　バのつく大砲？」
「まさか。生身の人間に至近距離でぶっ放したりしないよォ。ア～ハッハ」
いや、あんたならするだろ。絶対するだろ。もう気持ち良すぎて、花の子ルン●ンって感じじゃんか。
ともかく、俺は自分で音の謎を解明するため、煙が出ている紅壬の部屋を見にいった。　すばらしく破壊された部屋の中、数々のエロ本が破れ、紙吹雪となっていた。そして、奥で紅壬が気絶していた。横っちょに黒い大穴があいている。
どこでバのつく大砲を手に入れたんだろう、ということよりも、凄まじい破壊行動を平気でする玖月さんが怖い。『さん』付けじゃなくて、『様』付けにした方が身のためには絶対いいと、俺は本能で感じた。
俺が怯えている最中、局長が帰ってきた。下から局長と玖月さんの会話が聞こえてくる。
「ただいま」
「あ。どうだった、予算」
「上が恒例の……ん？　何か知らんが、焦げ臭くないか？」
「そうかな？　今から鮭でも焼こうかなって思ってただけだけど」
紅壬と鮭は同レベだった。
「サケ？　まさかあのピンクいヤツか？」
「え？　鮭、嫌いなの？」
「何を言っている！　当たり前だろう！　お前の料理を食べるのにもある意味の勇気が必要なのに、何であんな気持ち悪いピンクの魚を食わねばならんのだ」
「一回サメの胃袋にでもバラバラになって入ってこれば？　いや、

入らせてあげようか？」
玖月さんが愛用フライパンを持ちながら言う。局長は怯えてあとずった。
「アハハ。嫌だなぁ、嘘だよ。そんなリアクションしたら、もっと楽しもうと思っちゃうじゃん」
「嘘じゃなかったら余計に怖い。というか、お前はサディストだな」
「アハハ～。局長がマゾだから合わせてあげてるだけだよ」
「何？」
局長の頭に怒りのキレマークが付いた。それを玖月さんは見事に無視し、
「さ～。早く夕ご飯を作らなくちゃァ」
と、言いながらキッチンに去っていった。
俺はタイミングを見計らってから、下に降りた。だけど、とぼっちり回避には、少し早かったんだろうか。
局長が怒りオーラをまといながら、こっちを振り向き、
「おぉ…尭良。居たのか」
と、格好の獲物を見つけたように言った。
でも、俺にだって向こうには“貸し”があるので、恐怖で引きつる顔を、できるだけ憎たらしいほくそ笑みを浮かべながら、言い返した。
「あん。ちなみに俺も局長はバラバラになってサメかシャチの胃袋に入ってて欲しい」
「……最近玖月に似て来たな、尭良」
「そりゃどうも。それよりルイナは？　一緒に本部へ行ったんじゃねぇの？」
「あぁ。そこで、また本部からまた事件処理の通達があってな。資料を集めてから帰るので先に帰れと言っていた。後から来るだろう」
「へぇ。……ってまた俺たちにかよ」
「そう腐るな。ところで妙に今日は静かだな」
局長は辺りを見るように、首を横へ振った。

「ん？　そういえばアイツがおらんな。どうした、紅壬は」
「まぁ、いろいろあって。玖月さんが正義の鉄球を振り落としたとこだぜ」
俺の冷や汗かきぎみの笑顔の発言に、局長は全てを悟ったらしい。一瞬にして、苦い顔になった。

―〔参〕―『Are you an enterteiner ?<

――カランコロン　カラン
玄関の熊よけ鈴がなる。
「ただいまァ」
午後八時。疲れ気味のルイナの声が聞こえてきた。くずさま玖月さんのアットホームな返事が返ってくる。
「お帰り。遅かったね」
「あ～。玖月の笑顔がステキに見えるわ～」
「……何かその言い方が気になるんだけど」
「まぁそんなことはウルト●マンの故郷ぐらいに置いといて。それより聞いてよ」
一瞬身構える玖月さん。ソファでテレビのリモコンをニュースにするかバラエティにするかで取り合っていた俺と局長も耳をすませた。
ちなみに紅壬はというと、リビングの机で紙吹雪となったエロ本を惜しんで、落ち込んでいた。
「一応今回あたる事件、調べたんだけど妙なのよね」
「それって、被害者たちの関連性？」
「ビンゴ！　やっぱ玖月は察しがいいわ。そうなの、関連性が全くもって“ナシ”。しかも、どれも死因が腹部及び頭部強打なのよね」
「ほう。という事は武器持ちか」
局長もいつの間にか会話に入る。ちゃっかりテレビのリモコンを持って。
「もしかしたら素手だったりして」
俺はそう言って、リモコンを奪い返す。局長が眉間にしわを寄せて、
「おのれぇッ」

と小さく言ったのが聞こえた。
「素手なら大したクソ力よ」
「ふ～ん。で、犯人さんは大体われてんの？」
「名前までとはいってないけど、他の支局の連中に話し聞いたら『ガキ』だって」
「他の支局？　何だ、一回捕まえようと試みたのか」
リモコンの取り合いで俺と猿の喧嘩状態になりながらも、局長は質問した。
「うん。一度ならず何度もよ。でもトライするたびに、大けが負わされてるらしいの」
「で、上は一番成績のここにお願いしたってわけね。子供相手に情けないなぁ」
玖月さんが明らかにバカにして笑った。だけど、冷たい目をだった。あざ笑っている目ではなく、どこか真剣だった。ルイナは何か感じ取ったのか、少し心配そうに声をかけた。
「玖月……」
「ん？　何でもないよ～」
「……いや、そうじゃなくて」
「へ？」
「いいの？　紅壬が冷蔵庫あけっぱにしている上に、ビールをガバ飲み……」
ルイナは人の事を心配するヤツじゃない事が分かった。
「うぁああァッ？！　何してんの、紅壬っ！　ちょっとォ！！」
「ユリちゃんが……。いのピーが……」
エロ本を焼かれたのショックにより、紅壬は自我喪失を起こしてしまっていた。
そんな紅壬がまたビールの缶を空けようとした時だった。
――ピーッ　ピーッ　ピーッ
『緊急出動命令　緊急出動命令　第１管区９－ＡＸ　で連続殺人犯逃走の模様　至急現地に急行せよ　繰り返す……――――』

女の人の声がし、俺たちの出動を要請していた。
「紅壬、落ち込んでいるヒマは無いぞ。急げ」
局長はいつになくかっこよく言った。

―〔 参 〕―『Are you an enterteiner ?<

暗く狭いビルの谷間。不気味なほど静かで、俺と局長が走る音だけが聞こえる。
「局長」
俺は走るのを止めず、声をかけた。局長がこっちをちらりと見た。
「何だ」
「紅壬をルイナと一緒に残しておいて大丈夫なのかよ」
「仕方があるまい。ただでさえ、我々の支局は食費がものすごくかかるのだ。あのままビールを飲み続けられたら、たまらんぞ」
そう言う局長の眉間にしわが寄る。きっと……――
『おのれ紅壬ッ！　俺の分のビールまで飲むとは……。帰ってからどうなるか、覚えておくがいい』
と、思ってるに違いない。俺のまわりのヤツラは何でこう、いやしい人間ばっかなんだよ？
「それだけか？　もう問う事がないのなら、黙って走れ」
「……なぁ、今回のが上が押しつけた事件？」
「違うだろう。あの事件は昨日も第5管区の北で起こっているからな。成人していると仮定しても、一日で第1管区の南であるここには来れまい。まぁ何らかの交通機関を使わず、徒歩での移動を条件とした推論だがな」
いつもの鈍感な局長とは違い、俺の質問にテキパキと答えた。
「他に質問は？」
「は～い。どうして玖月さんをコンビニに行かせたんすかね？あの人に犯人の現在地、伝えてもらわなきゃ捕まえようが無くね？」
「……」
「え、ボケた？　とうとうアルツハイマー発症？」
「そそそそんなわけ無かろう！　わざとだ！　わざとッ」
急に顔を赤らめて、おっちょこちょいの子供みたいに言い訳をし

だす局長。
「そのバレバレの嘘、やめような」
「うッ！　可愛げの無いヤツめ……」
「今、どさくさに紛れて俺に嫌味、言っただろ」
「フン。これだからヒネクレ者は困るな。俺はお前に対する素直な感想を言ったまでなのに」
「どこが素直だァ！　あんたの性格はひねくれすぎて、一周まわっとるわァッ！」
「ならば、可愛げがあるって言ってやろうか？」
「あんたに言われても、うれしかねぇよ……。てか気持ち悪ィよ」
「何だと、貴様ァ！　こう見えても、数多いる支局長の中で若い方に入るのだぞ！　しかも人気投票での上位三名の常連だ！」
「一位じゃないんだ」
「こここのォ！」
局長が浮き筋立たしてもう反論できない状況になったときだった。
その場の雰囲気をぶち壊すように黒電話の音が鳴る。局長が胸ポケットに手を突っ込み、灰色の携帯を出した。開けて俺にも聞こえるように、ハンズフリーのボタンを押す。
「もしもし」
『あぁ、玖月だけど……イヴン。すごく気になったんだけどさ、君犯人の現在地、ちゃんと把握してないんじゃ……』
局長の機嫌が最高に悪くなった瞬間だった。
『あれ、イヴン？　聞いてる？　おーい』
怒りのため黙りこくって走り続ける局長に、必死に玖月さんが声をかける。
『何、怒ってんの？　すっごく痛いトコ指摘されて、マジで怒ってんの？　それとも嫌がらせ？　僕への当てつけ？　いや、当てつけじゃなくて八つ当たり？』
俺は局長から携帯をひったくり、玖月さんに事情を話した。
『ふぅん。素直に言えばいいのに』

「局長の性格曲がりくねってるから、しゃーないわ」
『まぁ……うん。もうそろそろ三十路だしね』
「ところで玖月さん。犯人の現在地、分かる？」
『それならバッチリ。今は第1管区内の――――』
玖月さんが居場所を言いかけると、俺の手から携帯が無くなっていた。局長に奪われた。隣りを見ると、局長が携帯の電源ボタンを強く押していた。
「あーッ！　何すんだよ！犯人の居場所を教えてもらわなきゃ」
「これは俺の携帯だ！　それに犯人なら、おのずとこちらに来るだろう」
局長はそう凄みを付けて言い、俺を睨んだ。
すると突然、目の前に中年の男が現れた。サラリーマンらしく、赤いネクタイが印象にのこる。……あれ？　シャツも真っ赤……――
「た、助け……て」
中年男はそこまで言うと、力尽きたようにコンクリートに倒れた。周りから血が広まって行く。
前を向き直すと、包丁を持った男がいた。もっている包丁や服に、血糊がべっとりと付いている。
「ほらな。俺の言った通り、向こうからおいでなさったぞ」
局長が誇らしく言う。いや……未然に防げたとか思わないのか？あんた。
俺が心の中で密かな不満を抱いた時、犯人は静かに言った。
「わぁ…今日は沢山料理が作れるや」
犯人の口が歪んでいた。俺はある種の憎悪を感じた。
局長が軽く構える。俺はちょっとした事を思いついた。服のドラえもん並みに何でも入っているポケットから髪ゴムを出し、それを局長に差し出した。
「何だ？」
いぶかしげに髪ゴムと俺を見比べる局長。
「い～や～。今さ、局長イライラたまってんだろ。だから、正義の

鉄鎚を下しがてら、発散よろしくどうぞって」
「……お前もなかなか怖いな」
そう言いながらも、局長は笑って髪ゴムをとった。長髪のうす紫色でストレートな髪がまとまって、髪ゴムに縛られていく。
縛り終わると、局長は愛用の剣の柄に手をのせた。
「戦闘準備完了だ。そちらはどうだ？　やられる覚悟はできたか？」
局長はほくそ笑んだ。局長がいつもと違って、輝いて見えた。おおお……恐ろしい。
「へ。どっちが料理されるんだか」
男は包丁の血をなめながら、言った。
いやいや。確実にいてこまされるのはそっちだから。今日の局長はちょい危ないし……。
俺は自主的に一歩さがった。局長も俺と距離を離すかのように、一歩前へ出た。
「行くぞ」
局長の厳かな声が、暗闇に響く。
「へっ！　随分と紳士的なヤツだァ！　今か」
犯人の男がそこまで言った時だった。
局長が一瞬で間合いをつめ、鞘から刃を抜いた。細身の長剣が上へと弧を描き、白くきらめく。その一撃が重かったのか、男が持っていた包丁は吹っ飛んだ。
男は高い金属音が聞こえた方に振り返った。だが、そこには正面にいたはずの局長がすでに回り込んでいて、右手に持っていた鞘を勢いよく振り降ろした。
鈍い音と低く短い呻き声が聞こえた後、男は倒れた。近寄って見てみると、男は白目をむいて気絶していた。
局長も鞘に剣を納め、男に近づいてきた。汗一つかいてない。すげぇ……。ちょっと感心していたら、当事者と目が合った。
局長は髪ゴムをはずす。ゴムからするりとうす紫色の長髪がとけ、いつもの髪型に戻った。

「改めて怖ェと思ったよ」
俺が恐る恐る言うと、局長は鼻で笑った。
「ふッ……これぐらいしておかねば、お前にもなめられるからな。それに……」
「それに？」
「早く終わらせなければ、夕飯に……いや！　そんな事よりドラマだドラマ！」
「……」
「な……何だ、その目はァ！？　金１０の主人公の服が可愛かっただけだ！　文句があるのかッ！」
一瞬のうちにして、イメージがタダのヲタクに成り下がった。

ダセェッ！

暗いリビングに男が二人いる。一人はぐったりしていて、今にも幽霊に化けるのではと思わせるような、落ち込み方をしている紅壬。もう一人は、その落ち込み気味男を見ながら、頭に手を当てている玖月。玖月の手には、コンビニの白いビニール袋が提げられている。
「うぅ、ちーちゃん……」
「はぁ。そんなに落ち込まないでよ」
そう言って、黒いロングコートを着た玖月がビニール袋を差し出す。その袋は不自然に長方形の形をしていた。
「何、これ～ェ？」
気の抜けきった返事をする紅壬。
「見てみなよ……」

「ん？　……あぁッ」
一瞬にして暗かった紅壬の顔が輝きを取り戻した。対する玖月の顔は、かなり微妙である。
「……ったく。君のせいでエロ本を買うはめになるなんて。局長命令として絶対に有りえないよ。しかも、今まで保ってきた僕の健全さも失われたよ」
「え？　まさか、お初？」
「初体験だよ。コンビニですごく恥ずかしい思いをしたんだよッ！　店員さんはまじまじと見るし……君のせいだッ！」
「あ……うを。すみません。でも……」
「でも？」
「熟女クラブって……？」

その後、再びバのつく大砲の業火を紅壬がくら必然的な事だろう。

―〔 肆 〕―『Ｉ　ｍｅｔ．＆ｌｔ；俺は出会った＆ｇｔ；』＃Ｉ

――ジリリッ　ジリリリリッ
目覚ましのうるさい音が遠くから聞こえる。
――ジリリリッ　ジリィリリリリリッ
うっせェ……。
――ジリリリリッ　ジジィリリリリッ
「今、ジジィっつっただろッ！」
俺はそう言いながら、目覚まし時計に踵落としをくらわした。派手な金属音とともにぺしゃんこになった時計が、俺の足下から出てくる。
げ……ヤバい……。玖月さんに見つかる前に……いや！　ルイナだ！　ルイナが誕生日プレゼントとして買ってくれたから……。俺は寝ぼけた脳みそで必死に考えた。
そんなとき、ある男が俺の部屋に入ってきた。
「おッはよう！　ねぼすけ尭良ァ　！今日はこのかっこよくて頼もしい紅壬兄さんが起こしにきてやったぜェッ……ん？　何、そのカッコ？」
俺は必死に壊れた目覚時計を隠そうとした。
「なななな何でもないっす！」
「いやァあるだろ。てか、慌て過ぎだから」
「何にもねぇよッ。だいたい慌ててねぇ！」
「あ……壱花ちゃんが……」
「え？！　どこどこどこォ！？」
俺が辺りをキョロキョロと見回すと、いつの間にやら足下の金属の冷たさが無くなっていた。
「おわー。こっりゃぁひどくやっちまったなァ。さすがにフォローできねぇわ。でもホント、お前って安く引っかかるよなァ」

「うをわッ？！　返せよコラッ」
俺は紅壬に飛びついた。だが軽くかわされ、床に頭からダイビングしてしまった。
「あ～あ～。朝から元気だな～。若いって、いいねェ～」
「ぎゃぁ！足で背中を踏むじゃねぇッ」
「しっかしまぁ……ルイナに恨みが相当あるようで。ニシシシシ」
「あ？！　素敵にシカトっすか？　しかも笑い方が…ふんぎゃッ！
あだ！！　いだだだッ」
「おらおらおるァ」
「ぎゃぁ！　ぐりぐりすんなッアダッ」
「は！　悔しかったらァどかしてみやがれ」
「紅壬。何？　その手のやつ……」
俺と紅壬の一瞬動きが固まる。声の主に視線を泳がせるとルイナが立っていた。
部屋の入口に立ちすくむルイナが、もう一度聞いた。
「ねぇ、紅壬。その手に握ってる物……」
「ここれは違ェ！　俺じゃなくて、アキ」
「紅壬がやったんだよ。触るなって言ったのに～。あ～あ」
「尭良ァ……てめェ……ッ」
「ほらほら！　ちゃんと謝ろうね～人の物、壊しちゃったんだし」
「何言ってやがる！　誰がこんな半男に謝んなきゃならねェんだよッ。だいたいな時計ぐらいでつべこべ……って俺やっ」
「時計ぐらい？」
ルイナの声色が変わる。いつもよりドスの聞いた声だった。俺と紅壬の動きがまた固まる。
「……へ？」
「時計……ぐらい……」
ルイナが右手を強く握り始めた。そしてその手を……――
「ややめろ！　また局長におこら……れ……」
「問答無用ォ！　かァくごォッ！」

そう言うやいなや……ってより完璧なフライングで、ルイナの拳は紅壬の顔にくい込んでいた。

「何だ？朝から刺激的な物でも見たのか」
紅壬の顔を見ながら、局長が言った。
「アホ。どう見ても被害者のツラだろうが。鼻血出してて、顔もボコボコだぜ？」
完璧に局長はドン引きした。
「え、まさかルイナがか？　夫婦喧嘩でそんなに？」
「誰があんな暴力ゴリラと夫婦になるかァ！」
今度は局長が被害にあった。紅壬の左手が局長の顔に沈みこみ、見事にイスごと吹っ飛ばす。局長は床に投げ出された。
「ひどい！　ひどいわ！　お母さんに何てことするの？！　あんたそんな子じゃなかったわ！　ほら、尭良もお兄ちゃんに何か言いいなさいッ」
局長は娘にはたかれた母親のように、悲劇のヒロイン体勢で高い声を出して言った。
「気持ち悪いっす。ちなみに局長も気持ち悪かったっす」
「んだとコルァ！？　確かに今、局長はかなりキモい事したけど、何でこんな男前がキモいんだよ！！俺は被害者だぞッ」
「紅壬、貴様ァ！　人が恥を忍んで、金１０から学んだ演技を披露したと言うのに……キモいとは何だァッ！」
「はっ。誰も演技してくだせェなんて言ってねぇよ、ボケが」
「うぅ……尭良、お前も何か言えっ」
俺はある人の方を少し見ながら言った。そう。昨日から、ちょっと怖い雰囲気を出している例のあの人を見ながら。
「玖月さん。どうぞ、一言」

「一言？そうだね……。……二人とも、いっぺん死ねば？」
笑顔の玖月さんに、リビングにいた全員が恐怖にかられた瞬間だった。

「あれ？　皆、どうしたの？」
怒りが冷めて、一時間後。ようやく二階から降りてきたルイナが、リビングで俺たちを見て聞いた。
「……」
「あ、ルイナ。もう朝ご飯、片付けちゃったんだけど」
「え～。玖月のご飯美味しいのにィ……クソ単純バカ野郎があんな事しなけりゃ」
そう言って、ルイナは鋭い目で紅壬を睨んだ。紅壬はチラチラと上目遣いでルイナの事を見て言った。
「あ……すみません。でも僕じゃないんです。僕が壊したわけじゃないんです」
「ななななな……何？改まって……。しかも『僕』って、気持ち悪いわね……」
「……ったくガキは。あの恐怖がわからねェから、まったくよォ……」
「何気に小声で言ってくれちゃってるし……」
「僕、何にも言ってません。いろんなことにちゃんと反省いたしてます」
「しかも、日本語ちょっとおかしいし」
「……るせーよ、イギリス人がよ。テメェに言われたかねぇっつーの」
「もう一発殴ろっか？」
ルイナが引きつった笑顔の前に握り拳をもって、紅壬につめよった。

その様子を見て、玖月さんはニコニコと笑い、局長は深すぎな溜め息を吐いた。
「夫婦喧嘩は後にしてくれ」
「夫婦じゃねぇッ！！」
局長の顔に、今度は紅壬とルイナのパンチがくい込んだ。また見事に吹っ飛ばされ、その軌道上にいた玖月さんが軽くよけたために、壁に激突した。
轟音とともに崩れ落ちる局長と白い壁紙。俺はあきれた。むやみにここの建物、壊すんじゃねぇって。もう今月のこづかいから引かれること間違いなしになってきたじゃんかよ……。はぁ……俺の素晴らしき“壱花ちゃんとデート計画”が金のため、台無しになりかねない。
「二人とも、落ち着きなって。」
玖月さんが笑顔でそう言うと、紅壬がすぐにイスに座った。ルイナもその素早すぎな行動に首をかしげながらも、黙って席につく。俺はその様子を見ながら、壁と仲良く崩れてる局長を助け起こした。
「おぉ……すまない、尭良」
「壁の修理代引くなら、紅壬とルイナの給料から引けよ」
「……」
局長は微妙な顔をしながら、まっさらな作戦会議用白壁のところにいく。
それを見て、恒例のルイナがブラインド降ろしと玖月さんがプロジェクターのスイッチオンをした。
「それでは今回の事件について、会議を始める」
局長がそう言うと、壁に写真が写し出された。
壁に写し出されたのは泡を吹いて気絶しているヤツの写真だった。あちこちに青アザがある。
局長は俺たちの様子を伺いながら、聞いてきた。
「何か疑問点はあるか？」
「う～ん。これって例の連続強打魔くん？」

第一声は玖月さんだった。顔がニヒルに笑っている。
「そうだが……どうした？」
「すげぇやり方ってコトよ」
「ほう。どこがだ、紅壬？」
「あ？　見るからに、叩きまくったって感じだろうが。ほら、頭とか特によ」
紅壬が重傷者の頭を指差しながら、言った。確かに、青アザとかがかなり多い。鼻血も出している。
鼻血ブー……。
「あぁ、そうだな。他に疑問点はないか？」
……。
局長は何かの気付かせるために聞いているんじゃないか？　これ。
俺はそう思い、写真をよく見た。グレーの短髪に見開かれた白目。泡が出てる口。オレンジのアロハシャツ。そして、小指をつめた４本の手。
……え？　つめる？　４本指？
「局長。もしかしてコイツ……」
俺が言いかけたとき、局長はうなずいた。
「気付いたようだな、尭良。コイツは新都心でも有名な暴力団組員だ。一連の事件に関する資料を問い合わせた結果、こういうヤクザ系の奴等が主な被害者だ」
「それでも妙よ。だって、ソイツらには何のつながりも」
局長はルイナの発言を静かに制止し、ポツリと言った。
「単なる暴力団狙いの線もある。まぁ犯人を捕まえれば、おのずどはっきりするだろう」
俺は局長のこの言葉にまとわりつく、嫌な予感をなんとなくキャッチした。
まままままさか……今回も……。
俺が心の中でおびえているとき、局長は力んで立ち、そして言った。

「ということで、今回も囮使用の陽動作戦だァ！」
キター！　来たよキタヨきたよォおおッ！　無駄に等しい囮作戦。今回の犠牲者は一体誰なんだ？！
「この囮はかなり重要だ…雰囲気もヤクザっぽくなくてはならない。ので、紅壬。お前に頼」
「死ね」
紅壬は即刻拒否した。しかも、「嫌だ」とかじゃなくて、「死ね」だ。相当ヤクザっぽいと思われたのが嫌だったらしい。ちょい怖ェ……。
「じゃあ誰にすればいい？！　玖月か？　それともルイナか？」
「……」
玖月さんは無言でバの付くものを出す。ルイナはそれの弾を装填した。
「すすすすまん。冗談だ。軽いジョークだ」
ゆっくりと下ろされるバの付く危ない筒。
「と、いうことで、尭良！　大役はお前に任せ」
「みんな威圧するもの持っててていいなァ～。俺ねぇもんなぁ……」
俺は無表情で局長を見た。すると、玖月さんがバのつくアレをそっと差し出す。
「尭良…使っていいよ。この前のウップンも含めてぶっ飛ばしちゃえェ！　キャハっ」
玖月さんに別の人格が入った気が……ってマジっすか？！　いいんすか？
「じゃあ、お言葉に甘えて……」
俺は局長に向かって構えた。
「え…尭良君。いつからそんな……ややめよう。俺は暴力主義では……ギャーああッ！」
夜まで局長は自室から出てこなくなってしまった。

―〔 肆 〕―『I met. <俺は出会った>』#II

――午後8時半。

全くといっていいほど光と人気のない鉄筋ビルの工事現場。俺はそこで一人で歩いている。

結局、局長の囮使用の陽動作戦は即刻却下され、みんながぷらぷらと、強打魔がよく出没していた現場を別れて歩き、発見次第犯人確保を行うという作戦になった。要は、いきあたりばったりでやるってことだ。

俺の耳には例の小型イヤホンがつけてあり、指には指輪形状マイクをはめている。

「にしても、蚊がうぜェなァ」

耳の奥から紅壬のイラつき気味の声が聞こえてきた。

「肉ばっか食べてるからだよ」

今度は玖月さんの知識的な言葉がとんだ。その言葉にルイナが反応し、質問をする。

「え、何で？　何でお肉食べたら蚊が寄ってくるの？」

「それは鉄分と脂が増えて、血が美味しくなるからじゃないかな」

「なら、ジャコおろしでもいいじゃねェかよ」

「白ジャコさん達はカルシウムが豊富なんだよ」

「へぇ……。玖月、あったまイイ！」

「ん？　でもアジとかはどうなるんだ？　ありゃァ肉じゃねェけど、脂たっぷりだろ？」

「誰も肉オンリーなんて言ってないよ」

「うわー。紅壬、あったま悪ィの丸出し」

「うっせェよッ！　ペチャ子が！　そんなことに関心してねぇで、胸がおっきくなる食いもんでも聞いとけ！」

「あ？　うっとしィわッ！　あんた、そんなに人の事心配してたら

将来はげるぞ！　赤サルボボッ」
紅壬とルイナの言い合いが激化したせいで、だんだん耳の奥が痛くなってきた。
俺はイヤホンをはずし、ジーパンのポケットにしまった。途端に今まで聞こえなかった静かな音が、耳に届いてきた。蚊が飛ぶ音や遠くにあるらしいパチンコ屋、そして風が通り過ぎていく音が、新鮮な空気と共に俺の耳に入る。
俺は気分が良くなり、夜空を仰いだ。見ると、紺色の地にところどころ黄色く光る小さい粒がある。左の方に目を移すと、朧月がでかい丸を作っていた。
あの日もあんな朧月だったけな。俺の目には、血に染まった月しか映っていなかったけどよ……。
俺はそのまま月から逃げるように、空を見渡した。すると、ある建設中の鉄骨むき出しの低いビルが目に入った。屋上部分に不自然に建っている黒い棒が……。
いや、人だ。誰かあそこにいる。
俺はそのまま、ビルを見つめた。黒いものが微かにこっちを向く。何だか、空が明るくなり、徐々にソイツの全貌が見えてきた。
黒の髪、前をあけている黒い服、俺と同じぐらいの身長。そして……――
――――闇だけを映す漆黒の瞳。
何かの合図のように、俺の手がかすかに震えた。

―〔 伍 〕―『Scared Eyes. <怯える眼>』#I

俺はしばらく景色全体を眺めるように、ソイツを見ていた。向こうも見下すように俺を見ている。視線をはずせない。手の震えもとれない。

「くそ！！　手の震えが止まらねぇ……ッ」

俺は小声で何かを紛らわすように言った。それでも俺は、自分の視線をその人影からそらす事ができなかった。

そのまま見ていると、その影は突然、建設中でむき出しの鉄筋から飛ぶように降り、消えた。そのビルまではそう遠くない。俺は消えた影を追い、ビルに全速力で向かった。

だけど、俺がついたころには誰もいなかった。暗い路地が月明りに照らされていく。それにつれて俺の不安も増していった。

不意に後ろから音がした。振り返るとそこには、俺が見たヤツがいた。黒の短髪、光のない眼。服にところどころ、血で赤に染まっている。

「この前ヤクザをボッコボコにしたのは、てめェか？」

俺は睨みながら聞いた。

「降りかかる火の粉は払いのけるまでだ」

軽い沈黙の後、ヤツは呟くように言った。

俺はコイツが犯人だと確信し、ちょうど近くに置いてあった鉄のパイプを二つとった。その様子を見て、ヤツも構える。手には何も持っていない。

素手か……。コイツ、素手で人間をあんなんにするのかよ。

「やるのか？」

ヤツは俺に聞いてきた。

「仕方ねぇさ。俺の仕事は、悪いヤツを捕まえるって仕事だからなッ！」

俺はそう言い終わった瞬間に、地面を強く蹴った。アイツの間合いに入り込み、右手の鉄パイプを下へ振る。空気を切る音の後に、地面を叩き割った感触が手に伝わってきた。
アイツは俺の鉄パイプを避けて跳んでいた。そして、その勢いで鉄筋の柱を蹴り、俺に向かい跳び蹴りをかましてくる。
俺はその攻撃を左手のパイプで防いだ。重い。蹴りの一撃が思ってたより相当重かった。
ヤツはそのままパイプを踏み台にして、後ろに宙返りをしながら跳ねさがる。さがった途端に、今度はアイツから仕掛けてきた。
俺との間合いをつめ、左からの回し蹴り、右ストレートを出してくる。俺はパイプで突き出してきた右手を振り払った。一瞬だけ、ヤツの眼と視線が合う。その瞬間、俺は動けなくなった。いや、動いちゃいけないと思ったんだ。
アイツの眼が……。
そんな甘さが命取りになった。甘さがスキを生み、そのスキに付け込まれた。
アイツの左拳が見えた時にはもう遅かった。腹に猛烈な痛みを感じた。
「う……ッ」
俺の体が崩れ落ちていく。その動きを利用され、さらに顔に膝蹴りをくらわされた。俺は後ろに大きく吹っ飛んだ。レンガの壁に激突し、背中にも激痛を感じた。
俺は体勢を立て直すため、立とうとした。だけど、目の前にはすでにヤツがいて、肘が振り下げられる。今度はさっきの攻撃とはケタ違いに鋭くて痛かった。俺は歯を食いしばり、呻き声を出すのを制した。
「終わりだ」
ヤツの声がそう言った。見上げると、俺が放したパイプを持っていた。そして、それを振りかぶり勢いよく下ろした。
俺は人間の本能というヤツで目をつむった。けど、まもなくして

俺に当たるより手前で、何かに当たる音がした。恐る恐るまぶたを上げて見た。
鉄のパイプを肩に受け立っている男。本当に真っ赤なその髪が風で揺れる。
「紅……壬？」
俺がそういうと、目の前の男が振り向いた。そして、ニヒルに笑ながら、
「ったくよォ。夜に運動したら、腹ァ減っちまうじゃねぇか」
と、言った。
「何だ、お前」
突然現れた紅壬をアイツは疑わしげにうかがった。紅壬の薄茶色の瞳だけが俺から離れ、ヤツの方を向く。
「そうだなァ……詳しく言やァ、このガキの先輩かなァ？」
「……こいつの仲間か」
「んまぁなぁ。でも今の俺にとっちゃァそんな事関係ねぇし、テメェにとっても関係ねぇこった」
そう言って、紅壬は顔も向けた。その顔を見て、ヤツは目を細めた。
「何でだ」
「何でってテメェよ……今から殺り合うってのに、そんな説明一々しなきゃなんねェのか？」
紅壬の狂心に火がついたんだろう。犯人が自分ともっとも近い戦闘方法をとるヤツだし。
そんな狂人のようににやつく紅壬にヤツは飛び掛かった。左からの攻撃を軽く避けた紅壬は、後ろで控えていた左手を勢いよく上に振る。ヤツはその手を上手く利用し、自分の手をのせて紅壬の背後にまわった。そして回し蹴りをくりだす。
それに対し紅壬は少し驚いていたようだが、回して来た足を右腕でガードし、支持足を払った。思わぬ攻撃にヤツは体勢を崩した。紅壬は力を入れてないヤツの右腕を掴んで、投げ飛ばす。

着地ギリギリのところで手をつき、アイツは背中からの激突を免れた。
「やるじゃねェか」
そう笑う紅壬にヤツは眉間にシワを寄せた。そして、後ろにさがって闇に消えていく。
「あ！　ちょッ逃げる気かよ？！　オイッ」
紅壬が慌てて闇の方に行った時は、もうアイツはいなかった。
「んだよ～。たァっく……おい、大丈夫かァ？　尭良」
俺は犯人の二の次っすか？　とか思いながら、立とうとした。足が微妙にふらつく。
不意に紅壬が俺の脇腹を触ってきた。触られたところから、猛烈な痛みが体全体に走る。俺はその痛みに絶えれず、片膝をついてしまった。そんな俺の様子を見ながら、紅壬は溜め息をついた。
「はぁ……。相当やられたな、お前。骨にヒビが入ってるかも知れねぇぞ」
「うっせぇよ」
「あ？　それが助けに来てやった人への態度かァ？！　全然テメェに呼び掛けても答えねぇから、心配して来てやったのによォ。イヤホン取ってたのか？」
「……だって紅壬とルイナがすっげぇうるさかったから」
「……」
俺の言葉に引きつる笑顔を浮かべた紅壬。
「あ。あのあとどうなった？　赤サルボボ」
「テメェもゴリラ症候群に感染したのかァ？」
「へ。症候群を英語で言えたらカッケェのに……これだから頭の回らないヤツはねぇ」
「ならお前言えんのか？」
「シンドローム」
「……俺が抱えて帰らなくても大丈夫そうだな。一人で……ってオイッ！　何そそくさと俺の背中に乗ってんだよ！」

「ふぎィ？」
「小動物の真似してごまかすんじゃねぇッ！」
「さぁ行け！　どぉどぉどぉッ」
「ち……チクショォッ」
夜に響く紅壬の声。俺は自分の話から上手く逸らすことができ、少しほっとした。

―〔 伍 〕―『Scared Eyes. <怯える眼>』#I

「じゃ連絡はここまで、お前らの眠気波にのって、六時間目の授業を始めるか。総務、号令」
「起立。礼。着席」
ガタガタとイスの音が鳴る。私は隣りを見た。いつもうるさいアイツがいない。私は手をあげた。
「あの、越頭先生」
「弓瀬か？　何だ」
「私の隣りの早弁君はすごい遅刻なんですか？」

私がそう聞くと先生はニヤついた。
「お？弓瀬ェ、もしかしてアイツの事好きなのか？」
「先生。実は私、意外に空手とかやってたりするんですが……」
「すすすすみません。冗談です」
「……で早弁君は遅刻なんですか？それとも休みなんですか？日誌が書けません」
「おお…すまん。沢森は……風邪のため休みだそうだ」
クラスがざわついた。
「え？　あの元気な沢森君が？」
「トラックにひかれても死ななそうなアイツが……」
「鉄バットで往復ビンタしても立ち上がってきそうなのに」
うわー…何か宇宙人みたいなこと言われちゃってるよ、尭良。
「おいおい。沢森だって人間だぞ？風邪ぐらいひくわな。まぁアイツが居ないうちにズンズン進めとくか。教科書３１ページひらけぇ」
そう言ってまた授業に戻っていった。
私はノートを開いた。風が吹き、ノートがパラパラとめくれる。窓を見ると、杉の木が激しく揺れていた。

「…ここからは前回のおさらいだ。日本は核暴走によって首都に被害が出た。それは放射能による汚染が原因だ。さて、日本の旧首都は？　えぇと、高城」
「東京です」
「さすが総務。それにより、首都が移転されたわけだが…」
担任の声と宏奈の声が、私の耳を素通りしていく。東京が首都なんて、今では基本的な昔話だ。
電力不足を補うため、茨城県太平洋沿岸に原子力発電所を設けたが、ある日原因不明の暴走をし原発事故を起こした。その爆風は東京にまでおよび、放射線濃度が随分うすれた今でも手付かずの状態。廃墟の都市ってわけ。そんな所だから、いろいろな都市伝説も生まれてる。

今、首都は山梨の甲府と静岡にわけられている。主要は山梨の方で、政府官邸とかがつまっていて、町はもうバリッバリの都会になってしまった。
当然のように格差社会も広まった。中流家庭はともかく、お金がなく借金をして居た家庭はとても生活が苦しくなった。無理心中も出始め、奇跡的に残った遺族たちはいろいろ犯罪に走っていたりする。例えば殺人とか。
犯罪ばかり起きて危な過ぎだから、今の日本は夜の８時以後は外出禁止状態だ。
「…であるからにしてお前ら、塾なんか行かずにちゃんとここでお勉強しろよ」
社会の授業はもう道徳と化していた。
それにしても…どうしたんだろう、アイツ。本当に病気なのかな？今までそんなことなかったのに。もしかして何かあったとか？
夏の生暖かい風が私をなぜか不安にさせた。

「てことで、今日はここまでにしとくか。４０分って早ぇよなァ……。お前ら、今日は掃除なしだ」
わーと歓声が漏れる。
「嬉しいのはいいけどよ、道草食わずにとっとと帰れよ。ほれ、早く帰る用意しな」
「先生。もうバッチリ帰る用意みんなしてます」
「……。わぁった。もうチャイムなる前に帰りやがれ！　解散ッ」
また、わーと歓声が漏れ、次々に生徒達が出て行く。私はそれを見ながら先生の肩に手をのせた。
「何だ、弓瀬」
「したたかな生徒達を持って、先生も大変なんですね」
「……」
究極に渋い顔に変化した担任を残して、私は教室を出た。
後ろから宏奈が、
「待ってぇ」
と、言いながら走ってきた。
「ねぇ、今日帰りに本屋についてきてくれない？」
宏奈は追いつくと、私に言ってきた。
私は少し迷った。ちょうど欲しい本があったから。でも、今日は何だかすぐに家に帰った方がいい気がしたから、宏奈の誘いを丁寧に断った。
「そっかぁ……。女のカンはよく当たって怖いとか言うしね」
「え……何かその言い方、夫の不倫を鋭く察知する嫁みたいなんだけど」
「だって沢森くんとバイオレンス入りめおと漫ざ……まぁ気にしないで」

宏奈は私に怪しく笑いかけながら、靴をとった。
「あぁ……もう玄関に来たんだ」
「もしかして、さっきうちが言ったことについて動よ……じゃなくてタダの若年ボケだよね？」
どっちも嫌味に聞こえるんですけど……。
「今日は東門から帰るね。じゃあ、バイバイ」
「うん。また明日ね」
そう言って、私は宏奈とは正反対の道を歩き出した。
校門を出ると、坂がある。私の家はその坂をくだって、くだって、くだって、くだったとこにある（あ、早口言葉になりそう……）。
まだ他クラスの授業が終わってないせいか、帰り道には全く人がいなかった。空も青くて気分絶頂になった私は、いろんな優越感を感じながら、坂を鼻歌まじりのスキップでくだって行った。
「なみ～んふ～数だァけ、んふふなれ～んふ」
下っ手クソな歌がどんどんエスカレートしていき、しまいには裏声で叫んでいた。
一曲歌い終わって、あぁ……何てバカなことをしたんだろうと思わせるように、辺りは静かになった。ふとその時、耳に金属のきしむ音が聞こえた。公園からだった。子供がいたのかな。
私は口止めのお菓子を渡すべく、公園に入って行った。
入ってみると、想像していたより大きい男の子がブランコが揺らしていた。金属のきしむ音が寂しさをにおわせている気がした。私はその子が知り合いに見えてならなかった。だから、声をかけてみることにした。
「尭良？」
その子はそのまま、きしむ音を出し続けていた。何だかムカついてきたわ……。
「あちょ――ッ！！」
私は奇声を発しながら、その黒い背中にドロップキック。
「フンニャーぁああ゛ッ！！」

彼は私にも負けないぐらいの奇声を発し、頭から地面に落ちた。
そして、二秒ぐらいしてから起き上がり、
「なな何だよ！！」
と、言いながらこっちを振り返った。
「あ。壱花ちゃん！　壱花ちゅぁああんッ」
男の子はそう叫んで、私に抱き付いてきた。やっぱり尭良だった。
証拠に私は間髪いれず、やつのあごにフックをかましていた。
「うぅ……痛い洗礼。これが愛の痛みなんだね……」
尭良は半ベソをかきながら、ブランコへと戻っていった。私も尭良につられるように、隣りのブランコに座った。
「制服着てんじゃん。リュックまで持ってきてるし……何？　さぼり？　てか何、このガーゼ」
ブランコのきしむ音をかき消すように、私は言った。
「あはははは～」
「あはははは～、じゃないっつーの。ここまで来たなら学校まで遠くないじゃん。怪我ぐらいで引っ込むなァ」
「え？　もしかして壱花ちゃん！　それって俺がいねぇとつまらんみたいな？」
尭良は満面の笑みを浮かべながらいってきた。私は左手引き、いつでもストレートをかませるよう準備する。
「すすすすみません。別に悪気があって言ったわけじゃ……」
慌てる尭良を見ながら、私は溜め息をついてブランコを揺らした。
途端に尭良も黙り、下を向いた。覗き見するように横目づかいで尭良を見てみた。

ハッとした。地面を見ているはずなのに、どこかもっと遠い――
――違う世界を見ている気がする。そんな目は前にも見ていた。
私は少し不安になり尭良に声を掛けた。きっと調子にのりはじめるかもしれないけど、どうしても声がかけたかった。

「ねぇ、どうかしたの？」
「へ？　何が？」
「尭良が。だっていつもなら、しゃべりまくってうるさいぐらいなのに、今日はダンマリじゃん」
「……やっぱ俺の事、気にし」
「気にしてるとかそんなんじゃないッ」
じれったさで思わず私はいきり立ってしまった。そんな私を尭良は悲痛な目で見てくる。
「……」
「そんなんじゃなくて……私は隠し事されてるみたいで……ただヤなだけなの！！」
「……」
「だってそうじゃん。いつもよりわけ分かんない雰囲気だしちゃってさ……好きだ好きだ言われても、こういう事されるからパンチとかかましたくなっちゃうんじゃないっ」
「……壱花ちゃんのグーにはそんな愛の秘密があったんだ」
「何、ボケとツッコミいれてくれちゃってんのよ……」
冷めたのか、私は静かにブランコに座った。
また、きしむ音が聞こえ始める。ずれたり、合わさったり。くっついて、離れて。
私はずっと前、ある人に言われたことを思い出した。

『いくら君を愛していても、僕は君と同じにはなれないんだ。だから、君の心なんて分かりっこない。でも、君は僕の心に居続けるんだ。君と話したり、遊んだりしたこの楽しい記憶は、僕にとって君との真実の触れ合いなんだから』

そう。でも知りたかった、あなたの考えてたことを。あなたがどこに行くかを。
「実は……」

不意に尭良が言った。私は思わず振り返ってあいつを見た。相変わらず下を向いて遠い目をしている。
「何？」
「実は昨日……俺、喧嘩しちゃったんだよね～、元気に殴り合いの喧嘩をさ」
尭良は苦笑いをしながらこっちを向いた。どことなく、いつもより力の無い笑いだった。
「女の子がからまれててさ。で、思わずかばっちゃったら、向こうがつっかかってきてよ。こっちもノリで殴り合いにしちゃって。ガキっぽいよなァ」
「……ん。それで？」
「そしたら、殴り合ってた当時者さんと目ェあっちゃってさ」
「うん」
「……どんなんだったと思う？」
「え……」

「怯えてたんだよ」
ぽつりと尭良が言った。力の無い、かすれた声で。
「お前が悪い、お前が憎い、お前が……――――怖い」
私は尭良の顔を見れなかった。ううん、見たくなかったのかもしれない。
「そんな目しててさ。正直、しんどかった。人を助けたい一心でやってんのに……逆に俺が苦しめてる、怖がらせてるようで」
「……うん」
「でも俺、どうしたらいいか分からなくってさ……で、ボ～っとしてたらぶっ飛ばされて、今はガーゼのお世話になってますだ」
こっちを向いて、ニカッと笑う尭良に私は悲痛な顔しか向けられなかった。

「まぁ、話っちゃぁそんなトコかな」
「……で？」
「で？　って何が？」
「だから……尭良はそれで何をしたいの？」
尭良が驚きの表情で見てきた。今度私が下を向く。
「尭良はその子に、何かしてあげたいんじゃないの？　謝るとかじゃなくてさ」
「うん……まぁ。それはあるけど」
「なら……それでいいんじゃない？」
「……へ？」
私はブランコから立ち、伸びをしながら言った。
「世話のかかるヤツめ……最後まで言わなきゃ分からんのかい。ったくぅ」
「……」
「……尭良のしたいことすりゃいいじゃんってこと。他人の私がいくらいいものを作ってあげても、あんたがあんたの言葉とか考えを相手に言った方が、ホントっぽくて説得力あるっていうか……その……」
「……」
「何よ、そのニヤけた目はッ！！　こっちはクソ恥ずかしいの我慢して言ってんのにッ」

「……壱花ちゃん」
「ななな何よ？！」
「やっぱり俺の気品ある美しきレディだァあああッ！！」
尭良はそういうと、襲いかかってきた（そう見えたのよ！）。でも到達する前に、私のひじが彼の顔にくい込んでいた。そのまま尭良はずり落ちていく。
「痛い……痛いよ……でも、これが愛の痛みなんだね」

本日二回目のガキには絶対見られたくない光景を作り出す尭良。ちなみに鼻血がちょっと出てて、どこか怪しかった。
そんな尭良がむっくり起き上がりながら、こっちに来てリュックを肩にかけた。
今まで青かった空が、きれいな緋色の夕焼けになって、尭良を照らしていた。どこか優しくて、どこか寂しくて。そんな背中を向けながら、尭良は出口に向かって歩き出した。すると、ちょっといったところで止まった。そして、顔を振り向けて言った。
「壱花ちゃん、サンキューな」
さっきまでの弱々しさなんかどこにも無い力強い笑みを残して尭、良は走り出した。その勢いで向かい側の民家の塀を上がり越えた。
え？　向かいの民家？　塀を越えるってことは入ったってことで……
――――バァウッバウバウッ
「ぎゃッ！　こっち来んなァああ！！　歯をむき出しにすんなよォ！　何でこんなにベタすぎなんだよォおおッ」
「ちょっと、うるさ……きゃーぁあああ！　不審者ァッ！」
「え……違いますってば！　違いますからそのたらいをしまっ」

――――カ～ン……

ご愁傷様です。でも――――
「いつもの尭良に戻って良かったじゃん」
私は騒がしい民家をすぎて、帰り道に戻っていった。

―〔伍〕―『Scared Eyes. <怯える眼>』#I

「ただいま〜」
「あ。おかえり、尭良。もうすぐご飯できるから……って何？　そのボロボロになってる制服。意外に制服って高いんだよ？　特に夏は洗濯もしなきゃならないから洗濯代もかさ」
「着替えてきまーすッ！！」
「あ。今、完璧聞いてないふりしたよね」
帰ってきた尭良に玖月はアットホームなのかよく分からない言葉をかけた。
「うん！　何も聞いてないっすよォッ」
尭良はそれに明るく返事を返し、勢いよく階段をかけのぼっていく。
その後ろ姿を見ていた玖月が、ソファでエロ本を見るのにいそしんでいる紅壬に声をかけた。
「……ねぇ。あれ、どう思う？」
「あれ……ってェ？」
「尭良だよ。昨日、イヴンがいくら問い掛けても、すごく上の空だったじゃん。それが今日の夕方になってこれだよ」
「あぁ……。ま、青春してんじゃねぇの？」
「青春？！　……なら、まだいいんだけど」
心配気味の玖月を、紅壬は横目でちらりと見た。
「そんなに心配しなくてもいいと思うぜェ。あいつ、意外にしっかりしてるしよ」
「……うん、そうだね」
玖月はそう答えると、視線をフライパンに戻した。紅壬は見ていたエロ本を閉じ、テレビをつけた。バラエティ番組の司会者が笑いをとり、スタッフがわざとらしく大声を出しながら笑っている。

「バカらしい」
玖月が小声でそうつぶやいたのを、紅壬は聞いた。だが、その番組をつけたままにした。

そのまま10分くらいすぎた。バラエティー番組は終わっていて、ニュースに入っている。
「よし、できた。紅壬、尭良とルイナよんできて」
リビングの机に夕飯を並べながら玖月は言った。
「あ？　面倒くせェな。自分でよんでこいよ」
「つべこべ言わずによんできなさい」
「……あぁッ！！　何でニュースにいのぴー出てんの？！　あ、やべぇ。超胸でけェ……ん？　グラビアアイドル伊野原智恵、某電子機器会社社長と不倫疑惑……？　えぇ、うそぉ？！」
紅壬は玖月の言葉を無視し、テレビに飛びついた。そんな彼に玖月はバズーカでもかましてやろうかと思ったが、せっかく作った夕飯にほこりがかかるのはイヤなので、ぐっとこらえた。
「もういいよ。君が使えない奴だって、よくわかったよ」
玖月はギャーギャー騒いでいる紅壬に皮肉を吐き捨て、二階に上がっていった。上がると彼は一番手前の部屋に立ち、ノックした。
「ルイナぁ、ご飯できたよ」
「わかったぁッ！　すぐ行くね」
ルイナの返答のあと、すぐに普通ではありえない機械音が聞こえてきた。玖月は渋い顔をしながら、今度は尭良の部屋のドアをノックする。
「ご飯だよ、尭良」
返答は無く、ルイナの部屋から聞こえてくる不気味な機械音が響くだけだった。
「ちょっと。引きこもりごっこしてんの？」

彼は皮肉を込めて言ったが、依然返答はない。玖月はイライラの限界を押さえきれず、
「ちょっと尭良ァッ！」
と、柄にもなく叫びながら、ドアを開けた。
開けた瞬間、ふわっと風が彼の頬をなでた。カーテンがゆれ、窓が開いていた。
「……ホント。青春だよ、まったく」
玖月はそうあきれながら、リビングに戻っていった。
戻ってみると、紅壬もいなくなっていた。テレビはつけっぱなしで、眼鏡をかけたニュースキャスターが律義に話している。

「……こっちも青春なわけ？」
玖月はそう溜め息をつきながら、彼らのおかずにラップをかけた。

―〔伍〕―『Scared Eyes. <怯える眼>』#IV

暗い路地を一つ、影が走っていた。その影は道に惑うことなく、迷いなく進んでいた。そして、月が見える場所まできた。

亮良はふと空を見上げた。あの時見た朧月ではなく、くっきりと映った満月が光り輝いている。月は彼の決意そのもののように輝き、その光で亮良の亜麻色の髪を照らしていた。

その月を見ながら、亮良は手を握りしめた。そこには金属の長い棒があった。ところどころに何か鋭利なものでつけられた傷が入っている。彼はその棒を見たあと、前を向いた。

もう少しで、この前争った場所につく。月明りの切れ目で亮良は突然走るのをやめた。

「……」

亮良は無言で金属棒の両端を持ち、そっと引いた。一つの棒は二つに分かれ、彼の両手に握られる。そして、亮良はそのままじっとして動かなくなった。

少し風の音が聞こえた。それと同じようにどこからか小刻みに地面を蹴る音が亮良の耳に届いてくる。亮良は一つの棒だけ逆手に持ちかえ、静かに構えた。わずかに月が雲に隠され、光がとぎれた。

その瞬間だった。光の切れ目から、黒い影が亮良を襲ってきた。亮良はそれをよけると、逆手に持った棒を突き出す。影はそれを腕で防いで、静かにつぶやいた。

「……また、やられに来たのか？」

月明りが戻り、相手の顔が照らされる。見ると、この前の少年だった。黒の瞳で亮良を睨みつけている。亮良は少し笑って言い放った。

「違ぇよ、バーカッ」
闇に対照的な明るい声が響き渡った。尭良の笑みに不快と不安を覚えたのか、少年は後ろに跳びさがる。
「……じゃあ何しにきたんだ」
少年の問いに、尭良は真顔に戻った。
「別に。ん～……でも、しいて言うなら……」
そう言いながら、尭良は軽く構え直す。
「喧嘩しにきた、かな～？」
意地悪く笑う尭良に、少年は戸惑った。これは真意なのか、それともももっと他の目的があるのか、相手が手の内を読ませない顔つきをしているからだろう。
少年は動かなかった。尭良も動かなかった。時間がただ流れていくだけだった。
突然、烏の鳴く音が聞こえ、尭良は空を見た。夜だというのに、大きな黒い動物が空を舞っている。尭良はそんな光景をぼうっと見ていた。
その時だった。
「喧嘩ってのは、相手にスキを見せる事かよ」
尭良の前で声がした。瞬間に鉄の棒を前にすっと出す。耳には鈍い音が聞こえ、手には何かがぶつかる感触があった。
尭良はゆっくりと前を向き直すと、少年の驚きの顔が目に映った。鉄の棒が突き出された拳を防いでいた。
「二度もくらうかよ。結構痛いんだからさ」
尭良はそう言って、意地悪そうに笑った。
「ちっ……」
少年は舌打ちすると、後ろに飛びさがった。そのまま闇の中に後退していく。それを見て、尭良は静かに叫んだ。
「逃げんのか？　また逃げんのかよ」
尭良の言葉に少年は足を止めた。
「お前、怖いからって逃げてんじゃねぇよ」

「違う。怖くない。逃げてもない」
「違うくないな。お前はただ怖いから逃げてんだよ。俺に殴られるのがそんなに怖いのかよ？」
「違う」
「あぁ、これは違ったな。別に俺じゃなくても、自分を襲ってくる人間全てが怖いもんな」
「違う」
「じゃあ何だよ。降りかかる火の粉を払いのけてるってだけか？」
「……そうだ」
「そうだ……だぁ？」
　尭良は顔をしかめた。いつもより数倍鋭い目つきで少年を見る。そんな見たこともない彼に少年はたじろいだ。
「他人の言ってることにイエスとノーしかつけられないから、そうやって人間への恐怖に怯えることしかできないんだよ」
「怯えてなんかない」
「お前の口が怯えてなくても、目が怯えてんだよ」
　少年の眉間にシワがよる。
「何だよ？　いっちょ前に悔しいのかよ」
「……うるさいッ！」
　少年はそう言い、地面を強く蹴って尭良に向かってきた。
　少年の右からの蹴りが尭良を襲ってくる。彼はそれを鉄の棒で受け止め、そのまま上にはらった。その力を利用して、少年は後ろに側転をする。さがる少年にむかって尭良は棒を投げた。
　棒は回転しながら少年の方に奔る。当たる寸前、少年はその棒を足で蹴り返した。
「自分から武器を手放すヤツがい」
　そこまで少年が言った時、もう一つ、手に残っていた棒を降り下ろしながら、尭良の影が頭上から勢いよく舞い降りた。少年は驚いたが軽く体を横にずらし、その攻撃をよけた。
　あて損なった棒は轟音をたてながらレンガの壁をえぐっていく。

茶色や灰色の塊が地面に落ち、砂埃を巻き上げた。
辺りは一瞬にして、にごった灰白の世界になった。少年はそれを見渡した。敵はどこにいるか分からない、見えない、聞こえない。彼にそんな不安が取り巻いた。
少年が辺りを警戒しているとき、尭良はその砂埃の世界の外にいた。頭を掻きながら、
「しくった……相手見えなくしてどうすんだっつーのよ、俺」
と、悩んでいる。もう一言、誰に言うでもなく彼はぽつりと言葉をこぼした。
「風がふいてくれりゃあなぁ」
彼がそうつぶやいた瞬間、生暖かい突風が吹いた。
「えぇ？！　何？　これって俺の言霊のせい！？　俺すごッ」
驚く彼を尻目に、風はみるみるうちに砂埃を消し去っていく。それに従い尭良の目が鋭くなっていった。そして、中から影が現れた。あの少年だ。
鋭くなった尭良の目は彼の姿をはっきりと映していた。
尭良の瞳にうつった少年は背を向け、何かを探すように辺りを見回していた。その様子を見て尭良は言った。
「おーい、こっちだぞ」
その声を聞いて少年は振り返った。わざわざ尭良が自分のいる位置を知らせた事が不快だったのか、眉間にしわができていた。
「そんなに怒んなよ。親切じゃん、俺」
「……何なんだ、お前。捕まえるとか言っておいて……おちょくってんのか？　それとも、ただ遊んでるだけか？」
「んなこたぁないって。ちゃんと、仕事にかけてる物もあるし」
「……命とか言うなよ」
「言わねぇよ。そんな大切な物、安くかけられるかっつーの」
「じゃあ何なんだ」
尭良は手の棒にいったん視線を落とした。傷だらけの棒、それを握る手。その手に力を入れる。そして前を向き直し、言った。

「自由……だ」
「は？　自由？　警察の犬に自由なんかあるわけがない」
「おいおい、ただ単に首輪はめられてる犬なんかじゃねぇよ。俺たちは……――」

「――獣だよ」
確かにそう呟く尭良に少年は驚いた。目の前にいる人間は自らを獣という。理性を求め続ける彼らが、自分は獣だという言葉を決して出さないと思っていた。そのルールのようなものの例外が目の前にいる人間である事に少年は驚いていた。
「まぁそれは置いといて……」
尭良は一歩踏み出した。そのまま少年にむかって歩みを進めていく。少年は彼の方へ体を向け直した。
「思ったんだけど、お前、何歳？」
「……」
「……」
「……十五だ」
「年のわりに渋いよな、お前」
「……お前は？」
「俺？　俺も同じく十五よ」
「……年の割にガキだな、ガキ」
「う、うるせぇよっ！　一回言われただけでも十分へこむわ！」
思わぬ反撃に尭良はだだをこねる子供みたいに怒ってしまった。本当に子供みたいに。少年はそんな尭良を見て少し鼻で笑った。
「と、とにかく」
余計にガキと思われて焦ったのか、尭良は本題に戻そうと大声を発した。それとともに、右手の棒を前に出す。

「同い年だからって容赦しない。さっさと逮捕させていただくぜ」
意地悪っぽく笑いながら宣言する彼に少年もまた、その笑みを浮かべながら言った。
「……やれるもんならやってみろ」
少年の心が音を立てて変わっていくのを、彼自身、まだ気づいていない。

尭良が少年と奮闘しているその頃、呼び出しを受けたイヴンは正装をし、警察機構ビルの特別公安課課長室の扉の前にいた。彼は扉の前に突っ立ったまま、中に入る気配を見せない。
そんなイヴンの顔は渋くゆがんでいた。
（何かやったのか、あいつら。俺が総監から直々に呼び出しを受ける時は、いつも局内の問題のことばかりだからな。ロクなことが無い）
彼の思考にうずまく黒くて暗いものがどんどん膨らんでいく。
（まさか、紅壬のやつがとうとう痴漢行動に……いや。あいつはもうすでに痴漢をしていると思える行動を多々しているし……）
しかも仲間を疑い始めている。
（いや……玖月か？　間違えて毒薬を気化させ、周辺住民に被害を……。それともルイナ？　部屋でわけの分からん音を出しまくり、騒音騒動で周辺住民に訴えられ……。ダークホースで尭良もありか？！　屋台のラーメンを三十人分たいらげ、金を払いきれず周辺住民に追いかけ回されて……）
絶対とは言えないけどそれは無いだろ、最後のは。と、つっこめそうな妄想がイヴンの頭にあふれ出してきた。
（うおぉあああっ！　俺には決め難し！　一体どれなんだぁああッ）

勝手な妄想に頭を抱えながら心内で彼が叫んだ時、扉の中から静かな声がした。
「そこにいるのは分かっているのですよ、イヴン・シルレイン。早くお入りなさい」
それはとても幼く優しい、だが美しい女の声だった。その声を聞いた瞬間、イヴンは敬礼の姿勢をとり、
「申し訳ございません。心の準備を少し……派出局局長イヴン・シルレイン、入ります」
と、いつも以上に大きな声を張った。そして、彼がドアノブに手をかけようとした時、扉が勝手に開いた。イヴンが少し視線を下に向けると、そこにはまだ五、六歳ぐらいの女の子が内側のドアノブに手をかけた姿勢で、彼の方にほほ笑みをよこしている。イヴンはそれを見た瞬間に敬礼の姿勢をまたとった。
「ご、ご足労申し訳ございませんッ」
「まぁ。そんなに緊張しなくてもよいのに」
少女はイヴンの行動にころころと笑いながら言った。
「さぁ、早くお入りなさい。あんまりあなたが入ってこないので、どうしたのかと心配してしまいました」
彼女はそう言うと奥へは入っていく。イヴンもつられるように、部屋の中へと入った。中は明かりがつけられていなく、月明りのみが足元を照らしていた。そこを頭の上で髪をちょこんと結んだ可愛らしい少女が歩いていく。彼女は中央にあるデスクの方に向かい、椅子に腰掛けた。
それを見届けると、イヴンは口を開いた。
「あの……今回はいかような用件で呼び出しを……」
「あ、今回は特別捜査と今月の予算の事です。だから、そんなに縮こまらなくてもよいのですよ」
「は……はぁ」
イヴンは顔を赤らめた。別にばれて恥ずかしかったわけではない。少女の笑顔が彼にとってあまりにも可愛いものだったからだ。

「さっそく本件に入りたいのですが……どうかしたのですか？　イヴン、鼻を押さえて。具合でも悪いのですか？」
「いえ、何でもございません」
　そう、ただかわいいものを見たら鼻血が出そうになっただけですから。
「そうですか、ならよいのですが。……まず特別捜査の件の事を先にお伝えします。今度の火曜日から一週間、温泉旅館で張り込んでもらいます」
「旅館？」
「はい。ですが、慰安目的ではありません。その旅館には一か月前から不審な事件が起こるようになり……そこの裏山では、撲殺死体が二体、発見されたそうです」
「はぁ」
「そこで一刻も早く犯人を逮捕するため、あなたたちを派遣したいと考えています。これは命令です。嫌であれば、今ここでしか取下げが認められないので」
「いえ。我々に任させてください。温泉ならやる気を出すヤカラが一人、いるので」
　いい方のやる気じゃなくて、犯罪気味のやる気だけど。
「わかりました。あと、予算の件なのですがもう少し押さえることはできま……どうかしましたか？　また鼻を押さえて……。体の調子がおかしければ、無理して出てこなくても良かったのですよ」
「いえ、本当に大丈夫です」
そう大丈夫。あなたのかわいい困った顔を見て、この男の萌え心が更に熱くなっただけですから。
　不審な行動を取り続けているイヴンに首をかしげながらも、少女――特別公安課課長は話を続けた。
「毎月、局長級会議に予算の向上を提出されてるみたいですが、もう少し出費を押さえられませんか？」
「すみません。大飯食らいが今でも足りないと言っているので。あ

れでもギリギリの数字なのですが」
「食費の事は構いません。私が言いたいのは……この派出局修理費なのです」
彼女はどこから出したのか、おもむろに机に置いた先月の決算記録用紙を指差した。
「……」
イヴンは絶句した。尭良が作り出す膨大な食費より、かなり多い。
「確かあなたのところのレボリューターは……」
「沢森尭良と井紅壬と薊玖月です」
「……その中で壊す人と言えば誰ですか？」
「紅壬とルイナです」
「え。副局長の彼女はレボリューターではないじゃないですか」
「ないですが、つるんで壊してます」
今度は少女が絶句した。紅壬の方がルイナにちょっかいをかけて怒らせているとは思うのだが、彼女をそこまで怒らせる言葉とは一体……。
少女が考えにふけっていたとき、低いうなるような音が部屋に響いた。
「も、申し訳ございませんッ！」
「仲間からの連絡でしょう。構いませんよ。それより早く出た方が良いと」
「し、しかし」
「私は構いませんから。出てあげてください」
「では、お言葉に甘えて」
イヴンはそう言うと、スーツの胸ポケットから携帯を取り出した。携帯は画面から光を発しながら、低くうなり声のようなバイブレーションをしている。その携帯を開けると、画面にはよく知っている人間の名前が表示されていた。
「メールか……」
彼は誰に言うでもなく呟き、そのメールを開けた。イヴンの目が

文章を追うように動いていく。そして読み終わると、彼の表情は少し笑みをたたえていた。
「どうかなされたのですか？」
「いえ、少し用事ができまして」
そう言って彼は課長に一礼をし、出口の方に体を向け歩き出した。
そして、扉にたどり着くと少女の方を向き、苦笑しながら、
「あ、あと予算の件なのですが、どうあがいても減らなさそうです。むしろ増える方向にいくと考えられます」
と、言った。そして彼は扉の向こうに消えていった。
そんな彼を見送ったあと、彼女は決算用紙を見た。
「これ以上ですか？」
そう言った彼女の顔をイヴンが見ていたら、完璧に鼻血を吹いていたことだろう。

―〔 伍 〕―『Scared Eyes. <怯える眼>』#V

あれからどれくらい時間が過ぎたんだろうか。都会の裏の闇、レンガの壁がしゃれていて、まあまあ広めの路地。少し前まではそんな場所だった。けど、今では砕け散ったレンガが散乱し、空気は粉っぽい。風のせいで舞い上がるたびに、俺の目に薄い赤色が映る。

それでも構わず、俺は棒を振る。

「そろそろ観念、しろよっ！」

そう叫びながら、鉄の棒を振ったから、口の中に砂っぽい空気が……ホント、気分が悪くなるし。でも、今の俺にはこれより気分の悪い事があった。

「はずれ。何回壁を壊したら気がすむ？」

何だコイツ！？　さっきよりおしゃべりになってねぇか？！　ねくらっぽかったのが、急に耳に障る奴に変わってる。

俺は棒をきつく握り直し、轟音と共に崩れていくレンガをさらに叩き壊す。

「だぁ！　チクショウが！」

舞い上がる砂埃の中から、レンガの赤い粉をかぶったアイツが出てくる。攻撃がかすったのか、微妙にやつの服の裾が切れていた。そこから案外白めな肌が見える。

俺はアイツの位置を確認して、また棒を振る。今度は避けにくいように、横から。

すると、向こうもそれを悟ったのか、片腕で攻撃を受ける。手に伝わってくるやわらかい重量感が、すぐさま押す力に変わり、俺を後ろにのけぞらせる。けど、バランスは崩れてない。

襲ってきた拳をよけながら、後ろに転がり、手元に残った一本の棒を投げつける。今度はきつく、棒自体に回転をかけながらもストレートに。

「……やっぱりお前はバカだ。武器を投げつけるなんて」
避けながらいうアイツに俺は思わず笑った。確かに、お前に当てる必要があんなら、こんなことはしないって話だ。
俺の意味深な笑みにアイツが首をかしげた瞬間、その後ろの壁が砕け散る。相当驚いてるな、あれは。
棒が直撃した壁はド派手に崩れて、下に積もっていた砂利を巻き込みながら、砂埃を起こしていく。俺が予想していたよりも多く広く白い世界は広がった。

最初はまあまあ戸惑ったが、俺はアイツの背後であろう場所に音もなく近づき、姿勢を低くして足払いを仕掛ける。何かが俺の足にあたった感触が伝わり、その何かが胸に倒れこんできた。
「はっは〜！　大当たりぃ」
俺はこう言いながら、倒れてきたアイツにプロレス技をかける。顔が相当痛そうにゆがんでますよ、旦那？　それにしても俺は不幸せだ。コイツじゃなくて壱花ちゃんに俺の胸へダイビングしてほしかった。してほしかった……。
「何、目を潤ませてる！？　こっちの方が随分、い、痛い」
マジで苦しみながら俺に話しかけてくるあいつを見て、さらに無念になってきた俺はもう少し、きつめに技をかけなおした（グキッ！　って聞こえたけど気にしない気にしない）。
もがき始める奴を尻目に俺は胸ポケットから瓶を取り出す。玖月さんの部屋に侵入して、いつも狙撃に使っている銃から中身をいただいてきた物が入ってる。多分、麻酔薬？　玖月さんが遊びで変えてなきゃ、麻酔薬。うん。

「君は今、二つの一つを選ぶ権利がありまぁす！」
楽しそうに元気よく言う俺。
「……嬉しそうだな」
楽しくなさそうに苦しみながら言う犯人の少年様（俺の手が動く

たびに苦しんでる）。

「この……麻酔薬（？）を飲んで捕まるか、俺に殴られて気絶して捕まるか。さぁどっち！？」

「どちらにしても捕まる寸法だな。それよりも、『麻酔薬（？）』とう自信なさげな言い方は何だ？！」

口笛を拭いてごまかしだす俺。こうするしかないんだ、こうするしかないんだよ君。

そんな大汗をかいている俺を見ながら、あいつはある事に気づいた。そして瓶を指差し、俺に問う。

「なあ、この紫色の髑髏マークは……」

あからさまに危険信号が鳴り響くマークに、俺の手は震える。実は瓶も玖月さんのところから黙ってもらってきた物だ。ちょっと湿ってたけど、気にせず入れた。……少量でお陀仏になる奴だったらどうしよう。

「それって麻酔薬って言うのか！？　毒薬とは呼ばないのか！？」

向こうもかなり必死です。悶えながら必死に俺に訴えかけてきてます。

「だ、大丈夫だって！　安心しろよ、ここここ、こういう趣味の人がいたっておかしくないだろ！！」

自分を落ち着かせるためにも、俺は大声で言う。そう、外はヤバめで、中は超安心物体なんだ。絶対そうだ、そうに決まってる。

俺は冷や汗をかいた手で、小瓶のふたを開けた。一瞬、絵の髑髏がブラックにニヤついた気がした。

「じゃ、じゃぁ君の要望にこたえて、一の方にしような」

「選んでない！　要望でもない！　お前、手が震えてる……あぁああああ！　い、今骸骨が笑った、黒く笑ったッ」

取り乱れるあいつをよそに俺は瓶ごと口の中に薬を突っ込んだ。

「ふごっ！」と言って、あいつの目が白めになりだす。もう見ていられなくて、俺は目をつむった。
数秒後、生暖かいものが俺のひざの上から落ちるのを感じた。そっと俺は目をあける。

アイツは白目のまま、よだれを垂らしてガックリと首を倒れさせていた。
「ちょ、待てって。これ、ヤバくね」
俺は慌ててアイツのまぶたを強制的に手で下ろす。
「って俺が待てぇえぇっ！　まず脈を確認しようぜ、俺！」
誰かに見られてたら、多分「変な子がいる」って感じで通りすがられてると思った。自分で自分に言い聞かせている俺。自分でも変な子だって思ってるくらいだ。
そんなことはさておき、俺はアイツの首に触って脈を探した。どこを触っても、脈が見つからない。慌てかけたその時、心音を聞けば早いと言うことに気づいた。
やつの胸にそっと耳を押し当てる（壱花ちゃんでやりたかった、壱花ちゃんの胸に顔を当てたかった、という思いがこみ上げてきて、ちょっと泣きそうになったけど）。しっかりと聞こえてくる心音。何となく安心くる俺。今日は玖月さんのドッキリ罠に見事にはまったよな。
そして、一つため息を漏らしてあいつを担ぐ。重い。俺はまたため息を吐いて、すり足でその場から去った。レンガの砕けた粉が目に入って、痛かった。

月光により、赤い鉄筋が冷たく光る。まだ建設ラッシュが続いているこの都市は夜も眠らず、まして休憩という時すらない。それでも、建てかけの鉄筋が剥き出しにされているビルは、一時的にその動きを止めている。

そこに、動きのある物が二つ、一つは鉄の上に座り込んで、もう一つは柱に身を任せ、ただ下を眺めていた。

柱の方の影が少し動く。

「おい、玖月からメールだ」

そう言って柱から勢いおく小さな影が飛び出る。座り込んでいた影は不機嫌そうに投げられたものを捕り、読み始める。

「んだよ、青春感じてたいい時に……」

そう言いつつ、画面に目を走らせる。一行下に進むたびに彼の目が怯えていく。そんな男を見て、もう一人の男も画面を覗きこむ。

『Ｓｕｂ：無題

ご飯どうするの？　まさか、僕に作らせておいて食べないってことはないよね？　いい度胸してるよ全く。まあ、食べないなら明日からが楽しい日々になるけどね、僕としては。もし食べるご予定があるんなら、硫酸かけて温めておいてあげるから、早めの返信お願いしま～す』

二人の顔が思わず引きつった。具体的な嫌がらせ内容が余りかかれていないのが、怖い。最後のニコニコしている絵文字とかも、恐ろしい。

立っている方の男が急に咳払いをした。

「紅壬、何かやらかしたのか？」

紅壬は苦笑いをしながら携帯を返す。舌うちが聞こえたが、あえて無視して話を進める。

「しかし、奇遇だな。何だ、お前も気になっていたのか」
風がふく。紅壬の嘘みたいに艶やかな赤い、少々はねている髪が少しゆれる。
「気になっちゃァいねぇって言うと嘘になるな。イヴン、てめぇは……」
興味なさそうな声が先に響き、急に後から少し真剣そうな声が耳に聞こえてくる。少しかすれた語尾に、ためらいが見えた。が、イヴンに軽く目を見られ、紅壬は言い直す。
「てめぇは尭良の考えている通りにするか？」
意味深長な彼の言葉に、イヴンは軽く頭をかく。顔は別に無表情。問いの答えを考えている素振りはそんなにない。少しの間が空いてから、口を開ける。
「考えている通りかどうかは知らんが、俺は俺の思った事をするまでだ」
「簡単な答えで」と皮肉を言われたが、無視。彼にとってはいつもの事だ。
「じゃあ、また行ってくる」
立ち去るイヴンの背中に「あいよ～」と軽く返事を返し、紅壬は腰をあげる。光り輝く町と歩き回る豆粒を見下ろしながら、「ガキのお守りはらくじゃなぇなぁ、おい」。そんな小さな呟きは、決して彼等に届くことはない。

―〔伍〕―『Scared Eyes. <怯える眼>』#V

久々に更新しました。遅くなってすみません。
でも、つまりが取れて続きが書ける喜びが心のなかで、騒いでいます。笑

―〔 伍 〕―『Scared Eyes. <怯える眼>』#VL

「尭良くん、二日休んでどうしちゃったんだろうね？」
聞かないで、私に聞かないで宏奈。そのまなざしが私にとってどれほどキツいか……。

「ねぇ、壱花？」

ウルウル可愛く聞いてくる宏奈に私の顔が引きつる。可愛いもの好きには耐えがたいその表情。宏奈の顔が元々綺麗なせいもあってか、余計に心にグサリ、くるものがある。
「いつも元気な夫が二日も休んでるんだよ」
「だから、夫婦じゃないって。カレカノの関係でもないのに、何でそんなにアイツの事を気にしなくちゃいけないんですか？」
宏奈（と自分の心）に負けて、私の口が話し始める。尭良とは本当に何でもなくて、もちろん私はああいうのタイプじゃないから、恋心の片鱗すら抱いてない。
「別にそんなキツく言わなくても」
「私が好きなのは山鳴先輩だけですからぁ！」
呆れる宏奈に更に追撃をかます私。山鳴先輩っていうのは、近郊の高校に通っている超イケメンな人。頭もいいし、スポーツもいけるらしい。あの体力バカとは大違いだ。
改めてその先輩のかっこよさを頭に思い浮かべてると、教室の後ろのドアが開く音がした。振り返ってみると……――――

「壱花ちゅぁああんっ！　さぁ、君の愛のチューを俺のここにぃ」
噂をすれば何とやら。奴は入ってきた瞬間にこっちにダイビング

ジャンプをしてきた。
私の顔に向こうの顔が到達する前に、分厚い国語便覧で叩き落とす。床に直で顔がぶつかったらしく、「ふごっ」という何とも変な声が聞こえてきた。そして、少し立ってから起き上がって、
「うぅ……愛の痛みは今日も強烈だ」
とか変な事言いながら、私の隣の席に腰掛ける。それを見ていた宏奈は、待ってましたと言わんばかりに、元気よく尭良に話し掛けた。
「おはよう、尭良くん！　二日も休んで、しかも今日も遅刻ってどうしたの？　もしかして、アイロンでも食べた？」
「いや、アイロンはないだろ、高城さん」
宏奈の“アイロン”という言葉に、尭良はちょっと渋い顔をした。でも、二日間、何があったのかは答えず、自分の鞄から黙々と教科書を出していた。
私も何で休んでたのかは、少しは気になってたから、もう一度聞いてみる事にした。

「ねぇ、何で二日も休んでたの？」
「え！？　壱花ちゃん気になるの？！　しょ～がないなぁ、ここにキスしてくれたら、教えてあげてもいいかな～」
「もう一度、ぶったろか？」
キレ気味の私の言葉に尭良は怯え、「そ、そんなに怒らなくても。冗談なのに」と半べそをかいていた。
「別に特に何も。まぁ、いろいろとありましてってところかな」
「いろいろって？」
「それは……う～ん。親父の仕事についての話し合いとか」
微妙に汗をかいている尭良をまじまじとみながら、うなずいてみる。尭良のお父さんの仕事、どういう仕事なんだろ。体力バカな息子が手伝わなきゃいけないくらい、大変なのかな。
こんな風に会話をしていたら、チャイムが鳴った。授業の始まり

だ。生徒は席に戻りはじめる。

「おらおらおら、席に早くつけ〜」

今は国語の時間、越頭先生の授業じゃないはずなのに、担任越頭が教室に入ってくる。それにみんな反応して、ざわめいた。

「お前ら落ち着け〜。まだまだ俺は若いから、別にボケたってわけじゃないからなぁ」

いや、そこら辺は誰も気にしてないよ。てか、あんたはもうボケてるよ。

隣の尭良の顔からはそんな言葉がうかがえる。ホント、私もそう思う。いや、クラス全員がそう思ったはず。

自分が発した言葉の後、三十二人の興味なさそうな目がいっせいに向いたのか、越頭先生は一つ、咳払いをした。

「とにかく、この時間は社会に変更になった。まぁ、面白い社会の授業に変わったんだ。感謝しろよ」

偉そうだ。ホント、偉そうだ、だいたいその“面白い社会の授業”が、あんたのせいで面白くなくなっているような気がする。

みんな、こう思ったと思う。私も同感です。

また、しらけだした空気に、今度はため息を吐いた越頭先生。心のそこから残念そうに漏らしたけど、このクラスはそんなんじゃ同情しませんから。

「まぁさ、転校生の紹介もしたかったわけだし、ちょうどよか――――」

「転校生ぃいいいい！？」

静まっていた空気が一瞬にしてわいた。すごい、みんなもう近くにいる子達と話し始めた。
「どんな子だろうね」
「女かな？」
「かっこいい子がいいなぁ」
「噂によると、尭良の親戚らしいよ！？」
ざわつき始めるあたりの様子。でも一番騒いでもよさそうな尭良は黙ったままだ。教室の前にあるドアをじっと見つめて、真剣な顔をしてる。少し不思議に思ったが、担任の「それでは！」という声が聞こえ、話し掛けるのをやめた。
「それでは！　お入りいただこうかな」
越頭先生は大声でそう言うと、ドアの向こうを見て、手招きする。それと同時に、教室のドアは音をたてて、開かれた。クラスの中が一気に静かになる。
学ランを着た男の子は静かに歩いて、先生の隣にいく。そして、正面をむいた。

どことなく飄々としている。黒い髪にちょっと灰色っぽい目が余計にその雰囲気を出している。でも、私はどことなく尭良と近い何かを感じていた。
少し時間がたった後、男の子の口が開く。
「小野崎　龍志です。よろしく」
ちょっと低い声が響いた後、みんな思い思いに歓迎の叫び、おたけびをあげた。
私は静かに隣を見てみた。尭良はただその転校生を見つめて、優しく微笑んでいる。本当に、優しげな目で。
それを見た私の頬が熱くなったのが、少しくやしい。

心は見えなくても　顔は見えるよ
何を考えて　何を感じて　何を思っているのか
少しはわかるんだ
だから　怯えるな　ただ前を向いて　進もうよ

↓↓See　you　Next　Time“Nighht
Square>evo.Balmy<”↓↓

To　be　continued??

―〔　終　〕―『Ｔｈｅ　Ｂｏｎｕｓ＆ｌｔ；オマケという名の妄想か！？＆

閑静な住宅街の一角、茶色くくすんだ木で立てられたログハウスのドアが揺れる。
「いらっしゃいませ」
店員の歓迎の言葉が聞こえ、周りを見渡してみると、人は一人もいない。店の中には、アンティーク調の丸い机が一つ、向かい合って置かれた木の椅子が二つ、置いてあるだけだ。
私は手前の椅子を引いて、客人を待つことにした。その間、かばんからちょっとしたノートを出す。そして、一人しかいない店員に、大好きなカフェオレを頼み、ゆっくりとした時間をすごした。
「いらっしゃいませ」
また店員の若い声が響いた。今度は深く低い鈴の音が同時に聞こえる。入ってきた少年が、
「あ、熊よけの鈴だ」
と、言ったのが聞こえた（店員は思いっきり「違う！」という目で少年を睨んでいたが）。
私は声のした方を見て、微笑みかける。
「お疲れ」
私の小さめの声が聞こえたのか、少年はこっちを見て飛び切りの笑顔を見せてくれた。
「作者も、お疲れ！」
意地悪そうな笑顔で、敬礼のしぐさを少年はとった。

「うぶっ」

鼻に痛みを感じて顔を上げてみると、テレビ越しで笑っている某アイドルグループの爽やかな笑顔があった。
本日、三回目のうたた寝にして、変な夢を見た私であった。チャンチャン（何かの効果音）。

作者（以下、作）「てな感じでね、夢を見たんだよ君らの！」
尭良「そんなこと知るかー！　大体なんで最初が物語り調なんだよ？！　てかあんたの持ってたノートはなんだったの！？汗」
作「あはは～」
尭良「だぁ！　横見てごまかすな！　もう俺、引くわ……」
作「自分も自分のやってることにドン引きでぇす（笑」
尭良「自分で笑うな！　むなしいわっ！　ったっく～。で、俺を呼び出したわけは何？」
作「えっとですねぇ……。『作者とキャラの面白い対談企画ぅ、パフパフ』がやりたかっただけです」
尭良「……何話すの？」
作「さあ？　『読者の皆様がもし、キャラに関する質問をくれたら』というなんとも無謀な条件付の企画だから」

（数秒間の無言が続きます）

尭良「お前、出直して来い」
作「了解（らじゃー）であります！」

こうして作者、ｉｎｅａの密かな企画は終わりをつげた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6332a/

ナイト・スクウェア<evolution>

2010年10月8日11時56分発行